7135

名人三幅對

桃川燕林子講演

特8
924

特
928

序

予一日破窓にありて書見の折友人之書肆來りて余に名人三幅對の序を乞ふ是を繙けば壁頭に英一蝶を現す彼が其の描く所の繪畫は今更余輩の訥辯を以て喋々を用せず彼が性行は皆卷中に編述せり、第二に彫鐫で天下に名を得たる横谷宗眠の傳を載せり、第

法師去了
小便無用
蘇高

三には左り甚五郎を記せり然れ共第一第二は行爲共其完全せるものなれ共第三に至りては恨らくは其一部のみに止れり然れこゞ彼が技倆や一を以て十を知るにたるべし乞ふ讀者一本を購ふに財を吝む勿れ

如月はじめ　　呑氣坊壹樂しるす

名人三幅對

桃川燕林改實講演
速記社々員速記

名人三幅對

第一席

一今日より講演致しまするのは元祿時代の名人のお噂でムい升が一体この元祿年官は名譽の人の現われました年と見へまして書家には佐々木文山俳諧師には其角嵐雪又畫家には英一蝶彫刻師には横谷宗眠抔と云つて隨分天下に有名の人其他數ふるに遑ない位でムいます総て物の名人と名をとりまするに限つて毎度申上るやうですが畫工に致せ職工にせいドウもうの氣が進みませぬ時には仕事を惰る者が多いやうで御座い升人形町通り浪花町俗にこれを駕籠屋新道と言ふのがあります此處にうの英一蝶は母親と二人で居りました全体このお

話しの時分には未だ英一蝶とは申しませぬ多賀蝶湖と言ッた頃ひでございヤがドウも此の名と言ふものは妙なもので多賀蝶湖では知らぬ人がございます英一蝶と言ふと子供衆まで御存じてムいますから一蝶の名前にして申上ますそれゆへ大人方へチヨツと一言して置きませぬと相成りませぬデ可なり弟子もありましたが誰も寄り附きませぬトいふのは仕事をしないとなると二月も三月も筆を執りませぬ母親も氣象を知ッて居りますから仕事をしろと言はずまた當人が氣が進まないと描かうと毎度言ふものでございますから遊べるだけは遊ばして置きます從ッてドウも其の家政も困難でございまする九尺二間の棟割長家のひどい家に這入ッて居ります日の八つ頃ひでもございませうか母親が頻りに臺所をして居りますと

○「頼む〳〵」と云ふ聲一蝶の母親は驚いた此樣な穢陋い

所へ來て大業に頼むなんて何人が沙入來か知らと出て見ると、若徒に草履取を連れた武士が二名、早速襖を取ッて　母「エー、沙入來なさいまし」　武士「英先生の住宅は當家と聞いて參ッたが」　母「左樣でございます、一蝶の住宅でございますが、斯樣なマ見苦しい所へ能く沙入來下さいました、何方さまから入らッしやいました」　甲「某は備前岡山の太守池田の臣で古田久右衛門と申す」　乙「拙者は本間藤十郎と申する者である」　甲「エー、君公より仰付られて小柄の下繪を沙注文に相成るのだが、先生は沙在宿かナ」　母「ハ、左樣でございますするか、エー昨夜チト遅寢をしたものでございますから、まだ二階に眠て居ります」　乙「ハ、それは〳〵夢を破るのは甚だ心ないやうであるが態々大名小路から參ッたゆゑドウぞ先生に一つ沙面會を致したい、沙起し申して下さる譯には成るまいかナ」　母「エー、宜しうございます、今

話しの時分には未だ英一蝶とは申しませぬ多賀蝶湖と言ッた頃ひでございヤがドウも此の名と言ふものは妙なもので多賀蝶湖では知らぬ人がございます英一蝶と言ふと子供衆まで御存じて仏いますから一蝶の名前にして申上ますそれゆへ大人力へチョッと一言して置きませぬと相成りませぬデ可なり弟子もありましたが誰も寄り附きませぬトいふのは仕事をしないとなると二月も三月も筆を執りませぬ母親も氣象を知ッて居りますから仕事をしろと言はずまた當人が氣が進まないと無に嘗いた物は人に笑はれる其のうちに氣が直ッたら充分に描かうと毎度言ふものでございますからマア〳〵遊べるだけは遊ばして置きます從ッてドウも其の家政も困難でございまする九尺二間の棟割長家のひどい家に這入ッて居ります日の入つ頃ひでもございませうか母親が頻りに臺所をして居りますと

○「頼む〳〵」と云ふ聲一蝶の母親は驚いた此様な穢陋い

所へ來て大業に頼むなんて何人が侵入來か知らと出て見ると、若徒に草履取を連れた武士が二名、早速襖を取ッて　母「エー、侵入來なさいまし」　武士「英先生の住宅は當家と聞いて參ッたが」　母「左様でございます、一蝶の住宅でございますが、斯様なマア見苦しい所へ能く侵入來下さいました、何方さまから入らッしやいました」　甲「某は備前岡山の太守池田の臣で古田久右衛門と申す」　乙「拙者は本間藤十郎と申する者である」　甲「エー、君公より仰付られて小柄の下絵を侵注文に相成るのだが、先生は侵在宿かナ」　母「ハ、左様でございするか、エー昨夜チト遅寢ましたものでございますから、まだ二階に眠て居ります」　乙「ハ、それは〳〵夢を破るのは甚だ心ないやうであるが態々大名小路から參ッたゆゑドウぞ先生に一つ面會を致したい、侵起しヤして下さる譯には成らまいかナ」　母「エ、宜しうございます、今

起さうと思って居りましたところで、ドウぞ先づは上りなすッて……」と言ふたところがひどい穢陋い家、古田と云ふ人はさうでもないが本間藤十郎は癇性でございますから、何だか座るのも穢ないと云ふやうな鹽梅　藤「古田、ひどい家だナ、これは此樣な所に這入って居る畫工ぢやア知れた者だナ」　久「それはいかぬ、話に聞いて居るか、一蝶なぞと云ふ人はエライ者で家なぞのことは構はぬ、畫工は畫さへ美事なら善い」　藤「そりやアさうだが餘りひどい家だ」　兩人は上りは上ったけれども蟲は切れて居りますし、何處へ座らうと云ふ所も無いくらゐ

第二席

母「親は其のまゝ二階へ上って參りまして「まだ起きないのかエ、一蝶や、チョイと起きとくれ、備前樣の御家來が入らしって厳

樣から御注文が出て下繪をお前に頼みたいと仰ッしやるから、ヨー降りて來て御注文を聞いてお呉れ、久しく仕事をしないから、モウ家でも困る、少し仕事をして貰はなくッちや仕やうがないよく眠るねー一蝶や」　一「ハイ〳〵」　母「備前樣の御家來が入らしッたヨ」　一「ハイ、宜いヨ、おッかア何？　備前徳利が轉がッて來たと？」之れを聽いて驚いた　藤「古田、ひどいことを言ふナ、備前徳利が轉がッたなんて」　久「そりやア相手が名人」　藤「名人だッてひどいや」　母「なせ、さうろの大きな聲をする、備前樣のお家來が下に聽いてるではないか、備前徳利が轉がッたなんて」　一「今往くヨ、おッかア今往く、仕事もするヨ、下へ往ッて待たしておく呉れ、今直に往くから」　母「親は氣の毒さうな顏をして降りて參り「御待ち遠さまでございます、唯今參ります」　久「ハ、左樣か」と兩人は不審の顏をして居るところへ、ミシリッミシリッと階段の音

をさせながら降りて來た英一蝶とは有名な者だが、何樣な人であらうと見ると、年齡四十恰好で穢ない袒袍を一枚、三尺帶をグル〳〵卷附けて眼脂だらけでございまして

二「へー沙入來なさい」両人は是れかい、是れは驚いたと云ふ面相

二「ドウ子唯今ほ挨拶を致しますから……ドウもこの合歡をしないうちは何だか口が粘ッていけませぬ、旦那樣方沙待遠でもチト沙待ちなすッて」両人「ハ、左樣か」と言ふうちに流しへ來て早く合歡でもするかと思ふと暫らく揚枝を使ッて居る

二「アヽ善い心持だ……エードウも失禮いたしました、唯夜少し飲過ぎました、それゆゑにマア朝寢をしました」驚「初めて面會する、拙者は本間と申す」久「拙者は古田久右衛門と申する」

二「へー私が一蝶でございます、ドウ云ふ沙注文でございますか」驚「他ではないが君公の仰せに尊公が下繪を描て、宗珉先生が壁を執ッて小柄を一

つ注文を致したいと申す」

二「へー、デ私が畫を描いて宗珉が彫る、へー、ドウも天狗を言ふやうですが、マア宗珉と二人で合作をましたら、チッとは見られやうかと思ひます、圖は何でございます」久「そこだテ、太守の仰せにドウぞ隅田川の乘合船の圖を充分に描いて貰ひたい、それも是れまで有る古圖ではいかぬ、今日の光景をツクリ寫して貰ひたいと云ふ仰せだ」

二「へエー、ドウも大名方が段々その贅澤になッて！　なやアその私と宗珉と二人で乘合船の樣子を見て、其の中で善い圖を取る、斯う云ふことに……」両人「さう〳〵、太儀ながら其の場所へ出張をしてナ、一目して是れは隅田川の乘合船の今日の所だと云ふのが分らぬければいかぬ」

二「エ、其のくらゐのことは何でございます、出來ないことはございませぬ、宗珉の所へ沙狂詰になりましたか」藤「是れからその宗珉先生の所へ參らうと心得る」

二「エー往く

ことはございませぬ、今喚びに遣ります」久「ハ、ゆ近傍かナ」一「エ、直き此の近所に居ます、昨夜一緒に飲んだんです、まだ眠て居りませうから……おッかア氣の毒だがアノー宗珉をチョッと喚んで來てお呉れ」母「エ、？」一「宗珉をチョイと喚んでお呉れ」母「ア、宜いヨ……私が宗珉さんを連れて參ります」久「それはドウも老母、年寄を使ッて氣の毒だが……」母「ナニ貴方、近い所でございます」一「お母ア〳〵ゆ茶を上げたかい」母「何だ？」一「旦那方に涼茶を上げたかヨ」母「親さんは目をパチ、ゝやッて赧い顏をして居る」一「ゆ茶を上げたかい？」母「何だ、大きな聲をして、まだ上げないヨ」

第三席

一「旦那、濟みませんナ、ゆ茶も差上げませんでカラッ話で……ゆ

茶を上げたいと思ッても茶が切れて……」母「茶が切れたぢやア無い、錢が無い！」一「旦那、濟みませんがゆ茶を買ふ錢を百銅もお呉んなさい」藤「ハ、ゝオイ古田、ねちい先生に出ッ會した」久「これは拙者ども悪かッた、これへ參ッて安座して居るのに土產物を持ッて來ないのは間違ひだ」古田「久右衛門は彼方を向いて鼻紙を取出し、それへ金子を二分包みました、マア其の時分の二百疋と云へば今日の二圓ぐらゐに當ますまいか」久「エー、甚だこれは先生、失禮だが、菓子折でも調へて參るであッたが、取急いで土產を失念いたしたドウぞこれで何なりと涼調へ下さるやう」一「エ、ドウも濟ません、チャアマア折角のナンですから戴いて置きますが、これは手金ぢやアございますまいナ」藤「手金ぢやアない」一「おッかア旦那が二分下すッた」母「ア、何だネー……誠にドウも旦那さん、ゆ御辨下さいまし、ドウも

職人でございますから、モウ少しも物を隠すことは出来ませぬ」
久「イヤ、ドウもそれが貴いところだ」　二「おッかア、これで茶を買ッて、茶は何でも宜い、番茶をナットばかり買ッて呉れ、それからモウ大抵河岸が帰ッたらう、魚一へ行ッて刺身を二人前塩焼を二人前、行きでも帰りでも、現金にやらなければ持ッて来ない日、アノ内田へ行ッて酒の良いのを一升……」　母「旦那様に上げるのか」　二「イエさうぢやアない、旦那を還して置いて、アトで宗珉と二人で飲むんだ」　藤「オイ古田、エラいところへ出ッ會したナ」
二「おッかア沙茶菓子もナ」　母「沙茶菓子はナニが宜い？」　二「焼芋でも買ッて来たら宜いや」　藤「古田、黙いたナアこれは……」古田久右衛門は其様なことが好きだと見ゐて手を拍ッて喜び「イヤ、本間、ゐらい男だ、此の氣前で無ければ、ゐらくなれない」と、両人が言ッて居る。母親は氣の毒さうな面をして出て行ッたが暫

くいたして茶だの菓子だの買ッて参りまして「エー、沙待遠さまでございました、唯今宗珉が参ッますから……」　両人「ハア左様か、それはドウも好い塩梅だ、殊更こちらから行かうと思ッたが来て呉れしゝばそれに越したことは無い」　二「おッかア行ッて来たかい」　母「宗珉は丁度今鍋湯へ行かうと云ふところ」　二「ハ、ア早起きだナア……茶を買ッて来たかい」　母「ア、沙茶と菓子を……」　二「菓子？　菓子なんざア買ッて来なくッて宜かッた、芋で澤山だッた」　母「ヨー旦那、沙茶を一つ召上れ、沙菓子を一つ……」　両人「ヤ、誠に忝けない」　二「河岸は帰ッたか」　母「今持ッて来る」　二「さうかそれぢやア此所へ出しちやアいけねい、旦那が帰ッてからで無ッと……飲みたがるといけねいから」本間は黙いた人物は横谷宗珉、名も大層立派だ、嘘ぞかし立派な人物だらう！　飲みたがるといけねいッて！」併し今てゝへ来る其の

「亂暴なー

と思ッて両名の武士は待ッて居る

第四席

ところへ宗珉がやッて來ましたが、是れも穢ない袒袍を一枚、三尺帶を締め、片ッ方の足に白足袋を穿いて片ッ方の手にブラ提げ、ヒロ〳〵道入ッて來た「オイ〳〵宗珉、何をして居るんだ、本當にマアお前も困る、足袋を穿くなら両方穿きな、脱ぐなら両方脱くが宜い、片ッ方穿いて片ッ方脱いでドウする？」宗「ドウする斯うするッて今錢湯の歸りに煙草を買ッた、紙へ包んで出しゃア宜いが掴んで出しゃアがッた、煙草を入れて來る物が無いから片ッ方の足袋を脱いで其中へ煙草を……」一「成るほど、こいつは宜いや、なやア煙草入の代りに……」宗「さうヨ」本間は驚いた「此男は一蝶より勢が強い」一「宗珉、旦那方に挨拶しろ

ヱ、是れは備前様のお家來で此方が古田様で此方が本間様だ……エー此男がその宗珉でございます」藤「ハア」久「ハア、拙者は古田久右衛門」藤「拙者は本間藤十郎とナす唯今英先生に伺話をしたが隅田川乘合船の小柄を合作して貰ひたいと云ふこと……」宗「へー」一「宗珉何だせ、今までの圖ぢゃアいけない、二人で往ッて乘合船の樣子を見て、アゝ是れは善いと思ッたところを彫るんだ、己れも一緒に往ッてチャンと圖を描く」宗「そいつは面白いナ、さう云ふことは一つやッて見たい……旦那、其の圖は何に彫りましたもので」久「そこだ、太守の仰せにはドウぞ素銅に彫りたいと云ふことで……」宗「フゝム氣に入りましたナ、一蝶の前だが、大名方の洒注文に此樣なことは無いテ、多くろの金とか銀とか云ふことになると彫刻師の方では極いけない彫上げても金や銀だと此の金は何処で是れが幾らとか云ふやう

に多く金銀の代ばかり言ッて彫刻師の技倆はサッパり見て呉れない、ナニ此方の望むところはマア素銅だ、赤銅や真鍮、鐵などへ彫るのは彫刻師の得意で、エー承知いたしました屹度一蝶と二人で幾らか目に附く樣な物を拵へませう」 藤「両先生が其のくらゐに張込んで呉れゝば我々共両人も參ッた甲斐があるやうなこと、就いてはその金子のところだ、両先生へ對して小柄一本に付いて上の仰せに三百両は遣はすと云ふこと」 両人「ヘエー」幾ら無慾のやうでも職人でげす、英一蝶がエライの横谷宗珉が小柄の彫刻が名人だのと言ッたところが合作した小柄一本一金一枚、金一枚と云ふのは七両二分です、金一匁が相場、何ぼ善いッて大枚三百両なら一人前が百五十両だから少し驚いたけれども英一蝶は「へー、三百両下さる」 藤「これはその手間として下さるのではない、両先生の名前へ對して下さるのだ、デ百金

は此處へ持參を致した」 宗「ヘエー……」 久「出來いたしたところで殘金二百両進せる、斯う云ふことに……」 両人「ヘヘエー有難うございます」

第五席

久「デこゝにその確かに約束をして置きたいのは日數だ、誠に癖癖が強くて居らッしやるから、一日でも日數を違へるとモウ要らぬと仰ッしやるに依ッて大きに掛りの者が迷惑いたす、デ日數のところは能く相談をして」 両人「ヘー」 久「幾日なら幾日と言へば其の通り上へヤ上げる」 一「エー、そヒやア何です承知いたしました……宗珉、モウチッと此方へ來な、色々相談をしにやアならねい、ドウだい待てば甘露の日和があるたア此のことだ、流石先方は大名で三百両出すが、今此處で手金を百両と言ふ

んだ　宗「ン、幾日掛るだらう」　一「幾日掛るッて考へて見ねい、小柄一本彫る、畫を描くッて雜作はねい、二日掛りやア出來る、出來るが三百両の仕事を二日や三日ぢやア價値が無い、少しは日が掛らにやアいかぬ、オイソレとは掛るめい、斯うしやう、家へ少し小遣を置いて江ノ島、鎌倉へ往ッて來やう」　宗「そいつは宜い江ノ島鎌倉を見物してから隅田川の乘合船の合作は面白いなア、直に船で往かう」　一「江ノ島は此方の岩本院は窮窟だなア、アア惠比壽屋が宜い、それから鎌倉は三橋だ、序でに金澤へも往かう、金澤は角の吾妻屋か」　宗「江ノ島鎌倉金澤まで乘出して往くなら、序でに熱海へ往ッて湯治をしやうぢやアないか」　一「エ、熱海へ往ッて湯治をする——熱海はゴタ〳〵していけない、寧そ修善寺へ廻らう」　宗「修善寺へ往ッたら箱根を突切ッて一つ箱根七湯へ往かう、彼處は宮ノ下の奈良屋が大きいから……」　一「彼處

まで往ッたら一つ東海道へ出ちまッて伊勢參宮と出掛けやう」　宗「さうサ、大和廻りから京大坂を見物して安藝の宮島へ往かう、それから長崎へ廻ッて來やうぢやアないか」　一「さうサ長崎の圓山で遊女を買ッて……、彼處まで往ッたら臺灣へ往ッて……」　宗「そりやア止せ」之れを聽いて　藤「マア怪しからぬ相談をする」　一「聞いましたか」　藤「聞いましたかも無いものだ、仕事をして仕舞ッてからなら何處へ往ッてもそりやア尊公等の勝手だけれども仕事の前に安藝の宮島から長崎、臺灣まで往かれて堪るものではない」　一「エ、これは實はその仕事をした後で往くつもりで……」　久「後で往くつもりなら宜い、……日數のところはドウだナ」　一「だから大きな聲をするなと言ふんだ……、エーナンです、二十日掛ります」　久「二十日間宜しい、然らば二十日間、其の代り一日も違約は出來ぬぞ」　一「エ、宜しうございます、二十日間

掛りますれば大丈夫……」宗「江ノ島鎌倉へ往っても……」一「都かにしないか……大丈夫です」久「確と約束を致す」其のうちに古田久右衛門は百両の金を其處へ出して別段に印證文をすることもございませぬ、手金として之を渡し本間古田の両人は立歸りました」

第六席

後に殘って一蝶と宗珉は躍出した　一「ドウだい、マア寢て居て福が來ると云ふのは此のこった……おッかァや今までナンだ貧乏させて氣の毒だッたが、マア斯う云ふ仕事が來りやア當分樂もされやうと思ふ、餘まり長く遊んだから美味い酒も飲めなかッたがねい、小柄一本ではマア金一枚が相場だが三百両下さるッて……」母「タッた一本だからお前達の技倆なら半日でも

出來やうけれども先方も名前に對して三百両と云ふ大金を下さるのだから此方も務めて笑はれないやうにしなけりやアいけないヨ」一「そりやアおッかァや承知だヨ、おッかァ此處に金が五両ある、當分小遣に……」母「何處へ往くの」一「ナニ、チョッと宗珉と二人で江ノ島見物に往く、それから勇氣を練って」母「今練らなくッても宜からう」一「さうぢやアない、先きに練らなくちゃアいかぬ……サア往かう」と言ふ、其のドウも苦しい中で九十五両と云ふ金を持った爲めにモウ一蝶と宗珉は何が來たッて避けやアしない、先方は大名だが此方は技倆が有ると云ふやうな顏をして出て往ッてそれッきり歸ッて來ない母親は今日は歸るだらう、明旦は戻ッて仕事をするだらうと思ふと、三日經ち十日經つ其のうちに二十日の日も追々近くなッたがおッかさんの所へ音信がないから何處に居るか知れない。さう斯う

するうちにトウ〳〵日限になりまするとと本間藤十郎古田久右衛門の二人は相變らず家來を連れて「賴む」母「入らッしやいまし」藤「エー、今日が丁度約束の日である、依賴に相成ッたる小柄出來して居らうがナ」母「誠にドウも御氣の毒さまでございますが、先達て旦那樣方が入らッしやいました彼の日から出たきりでございます」久「ハヽア何處へ參ッたか？」母「何處に居りますか、少しも當がございませぬ、色々心配いたしまして心當りの所へ人も出し手紙も遣りましたが何の返詞も參りませぬ、恐入りましてございますが、ドウか今一両日御待ちを願ひます、其の内には歸ると申せうから……」藤「それはドウも怪しからぬ、お前の方ではそれで善からうが殿へヲ上げなければならぬ、殿へヲ上げれば我々両人が迷惑するではないか」母「何と仰せられましても仕方がございませぬ其の居所が知れますれば宜し

うございますが何處へ參ッて居るか更に分りませぬ、誠にその二人が氣が合ッて居るものでございますから、チヨイと出ましても遲くなります、一昨年でございましたか手拭を提げて錢湯へ往くと言ッて出掛けまして半年ばかり歸りませぬ」藤「半年歸らぬ？」母「ドウしたらうと思ひますと漸々何でございます半年目に歸ッて參りました、おまけに何處の錢湯へ往ッたかと言ふと札幌の朝湯へ……」藤「札幌まで朝湯に往ッた？、嘘を吐いちやアいかぬ、明日も參ッて見るから今晩にも先生が歸ッたら……」母「承知いたしました、モウ今日は日限でございますから大方戻らうと思ひますが、歸り次第出來いたすやうにヲ付けますから……」老母が段々事情を言ふものでございますから、両人の武士も相手の無い喧嘩は出來ない、老母を捕まへて難儀をする譯にも行かぬ不承〳〵に立歸る

サアそれから毎日〳〵來るが當人共は歸らばこそ　久「老母や」
母「入らッしやいまし」　久「まだ消息は無いか」　母「誠にナンでございます、ぼ氣の毒樣でございます」　藤「マア日數を考へて見るが宜い、モウ今日は丁度三十四日だ」　母「さうでございますね、明日が三十五日で」　久「をかゝいぢやアないか、三十五日は？」
母「サウ何でございます、蒸物の支度を」　藤「婆さん、ナカ〳〵お前からして、流石はドウも一蝶の母親だ、就いてはモウ今日は何と言ッても戻らぬから」　母「ア、誠に恐入ることでございますが、ウ心當りの所が出來ました、それで今日は大方戻りませうから一旦歸りを願ひたう存じます」　藤「嘘を吐いてはいかぬ、我々共の身分にも拘はるやうな次第で屋敷へ歸られぬ、今日は迷惑

ではあらうが是れから戻らぬ、消息があるなら其の許へ人を走らせて早速両先生を喚んで貰ひたいものだ」　母「宜しうございます、是非ドウぞ今日は、ぼ歸りを願ひます」と云ふ賴みゆゑ餘儀なく立歸りました、其の後に殘ッておッかさんは笑ッては居るやうなもの、大きに心配をして、マア何處へ往ッたんだらう？と思ッて居る。其の翌朝でございます、早く一蝶と宗珉が眠むさうな顏をして、それだけの金を持ッて往ッたゆゑせめて着物でも拵へたらうと思ふと矢ッ張り着て往ッたときの褞袍で　宗「おッかアや、今歸ッて來た」　母「今歸ッて來たぢやアない、宗珉さん、怪のも今此處へ來るかい、何ぼ何でも這入り惡くはないかい、チョイとさう言ッてお呉れ」　宗「おッかア誠に濟まない、怒ッちやアいけない、一蝶が歸らうと言ッたが、已れがモウ一日と言ッてチョッと藤澤から小田原まで廻ッて小田原で買ッた遊女が

何でも年は十九か二十歳の新造で」母「宗珉、入口から其様なことを言ふ奴があるかい、道入り口此方へ」宗「ドウもおッかさん濟まない、誠にソレ段々何したものだから」母「お前さん達は段々何したで濟むだらうが、毎日〳〵私はドンなに困ッたか仕様がない、商人と違ッて武家様と云ふものは恐ろしい約束が堅い」一「ツイその歸り損なッて、今日は來るかエ」母「今日は來るかいも無いものだ毎日來る」宗「おッかさん、マア濟まないが小言を言はないやうにしておくれ、一蝶が居やうと言ッても一蝶より己れは年上だらう、誠に面目ない」一「今日は是れから二階へ上ッて二人で寢る、さうして緩くり身体を拵へて明日拵へる、武士が來たらモウ居所が分ッたから歸り次第拵へさせます、それで明後日入來なすッて下さいと斯う言ッてお呉れ、さうすりやア今日一日グッスリ眠てさうして明日往ッて圖を描ッて來て拵へるなア遊作アないも」母「そりやアお前達が拵へる段になりやア何でもないけれども、家に寢て居ちやア」宗「ナニ、家に寢て居たッて大丈夫で、さう言ッてお呉れ」一「おッかさん、實は二日ばかり眠ないので眠くてドウも始末にいけない」母「何と言ッたッけ」古田、彼の人は分ッて居るが、彼の本間と云ふ人は」一「モウ三日ばかり待ッて呉れと言ッて」と言ひさした儘二人は二階へ上る、直ぐに眠る

第八席

母親さんは此處へ來たら何と言はう、ドウしたものだらうと思ッて居るところへ古田、本間がやッて來た、母「入らッしやいまし」久「まだ先生方は歸らぬかナ？」母「まだ戻ッて參りませぬ」久「ドウも困ッたなア」母「エー太守は非常な怒立腹、其の件に付

いて我々共両人實は此の度の事では困じ果てた、先生方が戻るまでは屋敷へ歸ることは出來ぬから迷惑ながら當家を借用いたし當家に泊ッて居るから　母「それはナンでございますが少々消息がございまして明日は戻ることでございますから、ドウか今三日」　藤「三日が五日でも拂はぬ、一時先生に面會をせぬではならぬ、明日歸るなら明日まで此の所に、ノウ古田氏」　久「至極宜しい」　さう斯うするうちに後から車でございまして夜具の包を持込んで來た　母「オヤ〳〵」其のうちにまた焚出しが來る　母「これは何でございます？」　久「ア、當家へ手數を掛けては氣の毒であるからドウか手數をしないやうに」　おッかさんは弱ッて　母「エー、是非」　藤「イヤお前はさう言譯をするが、言譯では我々は濟まぬことが出來た」　久「ウー〳〵」と云ふ恐ろしい鼾聲　久「老母、何だナ、二階のありやア、大きな鼾聲だ」　母「エー、ナンでご

います」　藤「ナニ、先生歸ッて居るナ？」　母「イヽエさうではございませぬ、アノ猫でございます」　藤「猫の鼾聲にしては大變だ、これは」と本間藤十郎と云ふ人が階段をトン〳〵上ッて見ると一螺も宗珉も大の字形になッて眠て居ましたナ　藤「古田〳〵、居るヨ」　久「二階に居る！」　モウおッかさんが止めたが肯かばこそ、追ッ取刀で上ッた、さうでもない二人が斬られはしないかと心配して　母「待ちなさいまし」と言ッたが耳にも入れず枕頭へピタリッと座ッて　久「英先生〳〵」　藤「横谷先生」と肩の所を搖り起したが、疲れて眠て居るから　「エヽ、モウ飲めない」　久「ア、寝惚けて居やアがる、これはしたり古田久右衛門でござる」　藤「本間藤十郎でござる、覺しなさい」　「ヘ」　宗「エー」

第九席

幾ら熟く睡て居ても本間藤十郎と云ふのを聞いてヒョイッと二人は飛起きて見ると追ッ取刀をして居るから　両人「エ、沙早うございます」　久「何がは早い！　ドウも貴公等は怪しからぬ仁だ」　両人「エ、申譯もございませぬ、モウ實はろれがその何を致したのでございまして旦那その何が斯うマアそれでその即ち、かるがゆゑに、その而して是れから就中」　藤「何を言ッて居る、而して」　宗「デございますが誠にそていや就中を聞きに來たのではない」の併し私共が悪いぢやアございませぬ、先きでその遊女が悪いのです、いくら歸らうと言ッても」　久「これは怪しからぬ、各々方は酒に酔ッてさう云ふことを言ふて居られるから宜いが我々くども両人は殿様から悉くば叱ッを蒙ッて居る、何故その三百両の金子を先きに渡して遣らぬ、其方等が手金と言ふて其の内の百金を渡すなどと言ふことは名人と言ふ名を博ッて居る者は

さう云ふことは誠に氣に入らぬもの、それだから先方で推へる暇がむッても故意と怠惰けて居る、三百両と約束を致したら其の三百両の金子を宗珉、一蝶に渡して來いと斯うその沙叱りを受けた、それで殘金二百両を持ッて參ッたから沙渡しやさうと心得て居る」　両人「へゝエー、成るほど」　藤「それはさうじやアないか？」　一「エ、旦那様方の前ですがモウ隠しはしませぬ買ふ物は矢ッ張ッ子ー始めッから三百両チャーンと沙出しなさると」なんて圖に乘ッて言ひ出した　藤「さうだらう矢ッ張り二百両持參した、モウ此の度今までのことは取消だ」　両人「難有うございます」　久「此の二百両を渡す、即ち三百両是れで皆金だ、そこで日數だが、今度はその二十日の三十日のと云ふことはいかぬ、どのくらゐで出來るか」　藤「今度は日が一日違ッてもいかぬ、幾日で出來するか」　一「左様ですナ、オイ〳〵チョイと來な、チョイと來な、

二百両だ」宗「二百両？」一「ドウも二百両と云ふとチョイとつかいでがあるが、ドウ仕やう、久しく往かないからドウだい松島へ往かうぢやアないか」宗「松島へ往くならズット」久「ソロ、始まッたナ、ドウかその遊びの話は後にして貰ひたい」一「エ、何、ドウせ參るのは後で參りますので」久「何は、日數はドノくらゐ？」一「エー左樣でございます、日數のところはドウか四月の今日は二日でございますから、ドウか四月の十二日と云ふことに致しませう、當月の十二日」久「當月の十二日に參れば出來て居るナ」一「エ十二日に伊入來になれば出來て居ります」藤「半時も猶豫は致さぬぞ」宗「ヘー」藤「十二日正午の刻に取りに參るから十一日中に拵へて置かなければならぬ」一「エ、ハイ、それは屹度拵へて置きます」久「それで念の爲めだからナ、四月の十二日に我々共も両人がその小柄を受取りに參ッて」両人「ヘー」久「出來て居れば別段ナすところは無いが、万々が一其の小柄が出來て居らぬ節には斯う致す此の三百両は速かに返濟さッしやい」両人「ヘー成るほど」久「デ三百両の金子も返濟は出來ず、小柄も出來て居ないとなッたらマア氣の毒だが其のときはお前等両人の首は必ず持ッて參るから、其の節ドウ斯う云ふてもいかぬ二人の首を屹度提げて往くから」一「オイ宗珉大變だ、首が抵當だ」宗「首がモウ約定濟になッたのか？、エーナンでございますか、此の首でなくちやアいけませぬか」藤「其の首でなくちやアいかない」両人「宜しうございます」藤「此の後はモウ日々參らぬ、四月の十二日正午の刻に參る、確と約束した」両人「エ、宜しうございます、承知いたしました」側に聽いて居る母親はハラ〳〵して居る、其の中に武士は二百両の金子を渡して其の儘立歸つた

第十席

後に殘ッた二人はホッと息を吐いて　一「オイ四月の十二日まではてしにチョッと十日ばかり間がある、三日掛りやア出來るからドウだい一つ景氣直しに吉原へ出掛けやう」　宗「近所ぢやア面白くない神奈川が宜い、神奈川へ往かう」と二人が出て往ッた。今度はおッかさんも心配でございます、日限までに間に合せて呉れゝば宜いがと思ッて居ると、四月の十日の日に二人がまたドウも穢ない單襦袢一枚、一人はモウ單衣の肩の拔けたのを着て　一「おッかさん、エー今歸りました」　母「ドウした」　宗「エェドウにも斯うにも始末にいけないんで」　母「何と云ふ裝をしてお歸りだ」　一「何と云ふ裝ッて、己れには口は利けねい、貴樣言へ」　宗「おッかさん誠に濟みませぬ、一蝶が惡い譯でもなし、己れが惡い譯ぢやアない、チョイと遊女買ぢやア裸躰になれないが、チョイトばかり慰み事に手を出してトウトウ今度はスッカリ上げられて仕舞ッてモウ仕方がない、就いてはマアその小柄の一件だが、迚もドウも出來さうもない、ト言ふのはモウ一文なしにして仕舞ッて此の通りの姿で歸ッて來た始末、是れから宜ぐに一蝶と己れは失踪をする、おッかさんドウせ仕方がないから當分身体を隱さうと思ふ、アノ鹽梅では危ない」　母「ぢやア何かい、お前と二人で博奕をしてさうして取られて仕舞ッて小柄を拵へる資本も何も」　宗「エヽ資本どころか何もかも皆な無くなッて仕舞ッた」　母「是れから遠くへ往ッて二人で姿を隱して居る？」　宗「さう〳〵」　母「遠くに姿を隱して居ればそれは宜いが、是ッきりになるが」　宗「是ッきりになるとは？」　母「仕方がない、お前達はそれで宜からうが、私はドウする、他のことならば私も何とも言

へない、氣が進まないから暫は執れませぬ、氣が進まないから筆を持つことは出來ませぬのと隨分我儘一ぱいにして、ドウも仕方がない、斯う云ふ悴を持ッたが因果、宗珉さん他人のことまで私が小言を言ッては濟まないと是れまで思ッて居たが、今度と云ふ今度はお前方に呆れて何にも言ふことはない、早々何處へでも変をかくしてお居で」　宗「エヽドウもおッかアにさう眞綿で咽を締められるやうに言はれると」　一「ドウも誠に」　母「エヽナニ、一蝶早く宗珉さんと何處へでもお往で、お前よッ私はモウ遠い所へ往かうと思ッて覺悟をして居た」　一「おッかアも失踪するのかエ、おッかさんは何方の方へ失踪だ？」　母「私は西の方へ往かうと思ふ」　一「西の方へ？、ちやア京都か大坂へ往くのかエ、おッかアが往ッちやア困るちやアないか」　母「京都や大坂、其様な近い所へ往くンちやアない」　宗「ちやア九州？　西は九州薩

摩灘」　一「何を言ッて居る、他人の母親だと思ッて、おッかア何處へ往く？」　母「西へ往く」　一「西は何處へ往くんだい」　母「是れから一蝶やお前達は何處へ往ッて何をして居なすッても明日が日、上で尋ねられて捕取押になり、二人が首でも斬られて來る其のときは三途の川邊と云ふ所で遇ひませう私はモウ仕方がない、お前達の押へられるのを見てそれから死ぬのも餘まり死に兼ねるから、寧そのこと、こゝで私は先きに死なうと思ッて實は是れ書置を此の通り書いてある、サア〳〵早く出てお出で私はモウ此の通りだ」と彼の佛間へ納ひ置きました書置、それを悴一蝶の前へ投出すと思ふと用意なしたる剃刀を二挺合せて咽を突かうと致す、驚いて英一蝶はシッカリ母の手へ縋り附きました

第十一席

一蝶宗珉の二人は手慰みに掛りまして面白くもなく大金を失ひ家へ歸って來ればモウ明日は小柄を彫り納めると云ふ日に迫って居りますから、母親はドウしても二人が首を斬られるのを見て居るよりは死んで仕舞ッた方が善いから死ぬと言ッて泣き騒いで居ります。左しもの親孝行の英一蝶も途方に暮れまして　一「だから宗珉、言はないこッちやアない、歸らうと云ふのを動かぬものだから」　宗「今更らお前さう言ッたッて仕方がない、おッかさん覺悟をしたの死ぬのッて詰らないことを」　母「ナニ、死んで仕舞ふお前達が首を斬られるのを見て居る譯にはいかない」　宗「何方と言やアこの一蝶より己れが悪い幾らか年を取ッて居ながら博奕に掛ッて悉皆取られて仕舞ッて家へ

濟まねいと言ッて歸ッて來たなやア、死んで宜けりやア己れが死なくちやアならねいんだが、ドウか善い分別は無いかチ？」　母「お前さん達がさう云ふなら此處に沙金が五両殘ッて居ります」　宗「フム」　母「此の五両の沙金で地金を買ふと言ッても幾らでもない、二人とも技倆はあるものだから早速小柄を拵へてさうして古田様と本間様が入來になる時までに拵へてさへ呉れゝば別に仔細は無いのだから、一つさう云ふことにして下さることは出來ますまいか宗珉さん、一蝶もドウだい？」　一「おッかさん、ドウも濟みませぬ實はその地金を買ふどころぢやアない殘らずブッたくられて仕舞ッて何處へ往ッたッて百文の融通も附かないで困ッて居た、おッかさん、それぢやア五両の金を貸して下さい」　母「其の代り斷ッて置くヨ、明日の正午までに拵へなければドウしてもお前達二人の命は無いのだから今夜の

中に出來て居ないと私も生きて居ない積りだ、是れから隅田川へ往って其の圖を描って慈よ夜業でもして拵へ上げたら直ぐに持って來てお呉れ」　宗「ぢやアおっかさん、是れから直ぐに往って來ます」　母「ア、ドッぞ」　一「夜業を仕やうが、徹夜を仕やうが乾度今夜中にモウ拵へて持って來ますから、歸って來るまで早まってドウか自害などしないやう、首なぞを縊らないやうに願ひます、それではおっかさん誠に濟みませぬけれども金を」　宗「さう事が極れば二人で隅田川へ往って乗合船の樣子を見て其の圖を描くのは一蝶の役、彫るのは私の役だ」　一「ぢやアドウぞおっかさん、五両二人に出して貸えて貰ひたいもので」　母「ア、それは固より貸すも貸さないも親子の仲、宗珉さんも沙苦勞だが、さう云ふことに漸々母親も氣が融けた塩梅。一蝶、宗珉は喜んで其の五両の金を懐中に納れ其の儘浪花町の家を飛出した

第十二席

一「危ねい〳〵、モウ少しのことでおっかさんを殺って仕舞ふところだった」　宗「だけれどもナンだなア、お前の所の母親は豪氣なもんだなア、大抵な者ぢやア出來ないせ、此の貧乏の中で五両の金を取って置いた了簡と云ふものは別だ、ときにャア朝から何にも食はないが一杯飲らうか迚も五両ぢやア遠くへは往けねいから品川邊りで」　一「いかぬ〳〵、ドウして今度は品川ぢゃろの騒ぎぢやねい、お前は動ともすると錢を見れば飲みたがっていけねい、今度はモウドウ云ふことがあっても酒を飲に往くの遊びに往くことは出來ねいぞ」と二人ながら喧嘩ごとでございまして隅田川へ乗合船の圖を描りに往く。丁度橋場の渡頭の眞崎の方へ參りましたが、何分桜時分でございますから、人出で

が少なうございます、此の邊へは花見に來たり時々その田甫へ來るものですから渡場の船頭とも懇意です　一「老爺や、何時も壯健で宜いノ」渡場の五兵衛が「イヤ、コレは先生方は葉櫻でございますか？」　宗「葉櫻どころぢやアねい」　五「大層顏色が惡いぢやアございませぬか」　一「餘ッぽど惡るからうョ、ときに五兵衛さん、此の船をチイッとばかり借りていもんだ」　五「ハア、網ですか？」　一「何に網ぢやアねい、渡船を借りていんだが」　五「へ――？　渡船を借りてドウなさる」　宗「ドウせ花時分と遊ッて家の若者が渡しの方をやるんだらうがお前の乘ッて居る船を今日一日でも半日でも宜い」　一「少し仕事のことで來たんだからドウか船を貸して呉れ、今直ぐに思ふ圖があればそれで宜い、マア長いと言ッたところが半日ぐれねのものだ、一日の息れが船賃だ、不足ぢやアあらうけれども取ッて置いて呉れ」と金を一分出

した、其の時分百疋と言ッたら今月の五両にも向ひますくらゐ、金を先きに渡したから　五「ドウも先生方濟みませぬ、此樣に沙貰ひやしちやアば氣の毒でございます」　一「ナニ、構はねい、其の代りチョイと酒と肴を、ドウせ暫らく乘ッて居るんだから――冷ゐてはいけないから蒲團を四布の蒲團でも何でも構はない船中へ入れて貰ひたい」　五「ハイ〳〵、畏まました」　一「是れが酒の錢、是れが肴の」と何程出したか錢を渡した。五兵衛は喜んで酒肴の支度をして來る、給の道具でございますの、また盤其の他宗珉の道具も持ッて來て居る、先づ其の船の眞ン中の所へ陣取ッちまッて　宗「オイ一蝶、ボッカリしなくちやアいけねい、此方の船と向ふの船と行違ふ、其の船に乘込んで居る人の樣子を描るんだから」　一「已れが知ッてるョ」　宗「成らば今日中に一つやりていナ　一「やりてい〳〵、善い圖さへありやア已れが描くお前の盤

は早いから直にも出來上らァ、モウ是れからナンだなァ無暗なことは仕めいせ」宗「さうヨ、併しナンだなァ、彫刻師始まッて以來百五十両と云ふ仕事は始めてだなァ、澤山の物を彫るぢやァねい、タッタ一本の小柄だ」一「己れもさうだ小柄の下絵を一つ附けるのに百五十両たァ、相手が善い、立寄らば大木の蔭、大名の相手に限るなァ」宗「本當に考へて見ると夢だナ」と二人で飲みながら話をして居るうちに五兵衛の棹が艪に換ッて橋場の方へヒッタリと船が着きました

第十三席

五「エー先生、船が着きました」一「戯談言ッちやァ困る、上るんぢやァねい、また對岸へ往んだ」五「さうですか」五兵衛は復た艪を押して往ッて渡場へ來てピタリッと船を着けました」五「着きました」宗「着いたッて上るんぢやァねい」五「ぢやァ何處へも往きなさるではない、此所を往ッたり來たりするんですか？」両人「さうヨ」五「コレは驚いた、私はマァ始終渡船を漕いで居りますけれども一つ所を往ッたり來たりするのは始めてだ」奇体なもので乘る人が一々變るから渡場の船頭なども厭きないが、明けても暮れても二人だけで向ふへ往ッちやァ復た此方へ還ッて來る、橋場へ往くかと思ふと須田の方へ往く、一つ所をモウ五十遍ばかりやッて居るうちに五兵衛も實に驚ろいて「先生方、私も是れまで船を漕いで居るが、此樣な面白くない船を漕いだことはない」一「お前は面白くなからうが此方はそれどころぢやァねい、命賭だ」五「命賭ですと？」と五兵衛は不審さうな顔をした。一蝶は始終向ふの船に乘込んで居る人の樣子を見て描らう〳〵として居る、横谷宗珉も始めのうちは頻りに見張ッて

居たが、其のうちに酒は追々醉ッて來るし疲れて居るから居睡を始めた、英一蝶は怒るまいことか「不實な野郎だ、自分の母親が死ぬと云ふのではないから宜いと思ッて座睡をして居る」と時々搖り起す、眼を擦りながら

宗「圖は描れたか」

一「まだ描れない、一つ變ッた圖を描らうと思ふからナカ〳〵描れない」是れが今時の人なら前席ヲ上げる通り自分の想像で圖も描れるし小柄も彫れますが、さて昔の人は堅うございます、チャンと乘込んで居る所を見て圖を描らうと思ふから面白い圖と云ふもの

宗「ハヽ、是れはいかない、五日でも十日でも掛ッてチャンと乘込んで居る所を見たら宜い物があるだらうけれども、ドウも此の樣を描ッたところで仕方がない、是れは家へ歸ッて事に依ッた

ら母親を連れて江戸を一つ逃げ出さうか知ら、ト言ッて無暗に此方の考へで畫いたところが仕方がない、ドウしたら宜からう」と思ッて頭りに一蝶が考へながら向ふで乘込む船の樣子を見て居ると橋場の方から出ました船、船頭は人々の集まるのを待ッて居る。ところへ乘込んで來たのが須田村邊りへでも歸へるまるすか、稻荷樣の神主と見ねて裝束を着け烏帽子を被り、侈幣を持ッて居るのは祈禱にでも往ッた先から如何さま裝束の儘、戻るのでございませう、此神主が舳頭の所へ來て腰を掛けた、英一蝶は筆を持ッて居たが「これは珍らしい、渡船

東を着けて乘ッたのは面白い」と思ッて居る、續いて二人這入ッて來たのが是れは女太夫でございます、某は烏追に出ると云ふ彼の邊に住んで居りまするものか、其の時分の女太夫は皆なその笠を被ッて三味線を持ッて居る、デ圖がチョッと變ッて居りますと

ころへ須崎村へでも歸ることするのか花賣の老爺が花の荷を船の眞ン中の所へ置いて、丁度四月のことでございますから、色々賣れ殘りの花がある、其の荷の上に頬杖を突いて水の流れを見て居たが煙管を取出し懐中から火道具を取出してカチ〳〵打って煙草をつけたが喞へ煙管神主と懇意と見ゑて話をして居る樣子。英一蝶は唯其の圖を見て居たが「此の花屋が中へ這入ッたんでスッカリ喞が面白くなッたワイ」

第十四席

兎角うして居るところへ一人の供を連れましたる武士、其の頃ひめ風でございますから卷羽織と云ふのを致し、八分反の富士笠と云ふのを被り長い大小を帶して居る、續いて居る供は奴頭でございまして眼のクリ〳〵とした誠に今日で言ふと活潑と云ふやうな姿で法被の裾を捲って仕舞ッて脚を露して居る、嗜の所へ炙隠しと云ふ三角の紙を斯う當てゝ居ります、是れはドウ云ふ譯かと申すと昔はその彼の野郎足が弱いと見ゑて三里の灸を點て居ると言はれないやうに三里の灸を隠したもので、此樣なものを當てたら尚目立つんだが、ドウも昔の人はオットリとしたもので、それが主人の後へ附て居ります、今船が出やうと云ふところへ大紋附半纏股引、腹掛と云ふ扮裝で、大工道具を擔いだ職人が二人やッて來た「ア、こいつは尚は面白くなッた」と一蝶は頻りに其の圖を描ッて居る。丁度船が隅田川の中流邊りへ參りましたる頃ひに待乳山の方からキー〳〵と鳴いて來たのが杜鵑、乘合ッて居た者が皆なその中空の方を見向きましたが喞へ煙管の花賣老爺が空の方を見上げたところと云ふものは實にドウも是れは跳へと云ふやうな圖でございますか

ら筆を執って一蝶は見る〳〵間に下書きを取りまして　二「宗珉〳〵　オイ宗珉チョイと見ナ」　宗「イヤー是れはドウも一蝶面白いなア、ドウした？」　二「ン、下繪を描ッた」　宗「神主が居る武士が居る花屋の荷が此中での大立物だナ」　二「さうヨ、此の花賣の老爺が御へ煙管をして居る圖は是なら宜からうと思ふ」　宗「宜い、これは」其のうちに船が行違ひに相成りますると、ピタリッと船の中に座り直した、仕事に掛ッたらモウ大盤石でございます、筆を執ってスッカリ下繪が出來た　二「サア直ぐに頼む」と言ッて其處へ出す、飲ひ酔ッてグッ〳〵して居るところはドウも價値はない人物、だが横谷宗珉其の頃の人物で盤を執って船の中でカチ〳〵始めた、ドウもその宗珉と云ふ人は盤が早かッたさうですナ、今の時間で云ふと三十分ばかりの内に彫上る、勿論その長く掛ッて居るやうでは巧い物は出來ませぬ、急場の仕事

のやうだが、さう云ふときにこの美事な盤が選入りますするもの。彫上ッたのを一蝶の前へ出して「サアドウだい」　二「ウ、ム、善く出來た」　宗「お前の下繪が善く出來たんだ」　二「ナニ、さうぢやアない、盤が巧いから此の通り下繪が引立つ、サアモウ是れが出來て見るとグッ〳〵して居られない、徹夜をしても思ッたが、まだ日が暮れぬい、日の暮れぬいうちに出來上ッたのは早い、サア家へ往ッておッかさんを喜ばせやう」　宗「さう〳〵誠に母親に對して済まない」　二「ぢやア往かう、オイ船頭や」　五「先生方是れから何時までおやんなさる？」　宗「モウ止めだ、橋場の方まで船を」　五「上りますか」　両人「上る」　五「さうですか、うりやア難有うございます、ドウも私は考へて居たラ、此の塩梅ぢやア今夜終宵やられたらドウ仕やう」　二「戯談言ッちやアいけねい、まだ此處に酒と肴が残ッて居る、是れでお前飲まねいか？」　五「難有うご

ざいます、船賃を浮山下さッて酒肴まで戴くなんてエライことになッた、喊に済みませぬねい、是れで貰はねいのは祝儀ばかりだ」　二「此の老爺、嫌やなことを言やアがる、オイ宗珉幾らか遣ッて呉れ、彼様なことを言ふから」　宗「オイ嫌味を言ふない、サア一分」　五「エ、難有う存じます、何だか催促ッしたやうで」　宗「アレはど沒催促ッしたぢやアねいか」　モウさうなると錢金は有るやアしないが品物が出來たから氣が大きくなッてその小柄をば風呂敷に包みまして宗珉が懐中へ納れドン〳〵〳〵　二人は駈けて參る、今戸橋まで來る間は別に沒話がございませぬ

第十五席

ト向ふから色の黒い坊さんで、此の頃はその道行振なぞゝ言ッて能く人様が着ますが其の時分は俳諧師か何かでなければ餘り此の被布のやうな物は着ない、縞の被布を着まして一杯機嫌と見えてヒョロヒョロ蹌踉ながら來た人がある、宗珉が之れを見附けて「オイ一蝶、彼處へ來たのは茅場町の兄貴ぢやアねいか」　二「オヤ、兄貴だ〳〵」　此の二人が兄貴と言ふのは茅場町に居りました寶井寶晋齋、其角、是れ亦有名の人でございます、芭蕉十哲の一人嵐雪、杉風なぞゝ言ッたら同じ十哲の内で有名の人でございます　宗「誠に沒無沙汰をしました」　其「イヤ、宗珉と一蝶、何處へ往ッた葉櫻へでも往ッたのかい？、ドウも此の間チロイと聞いたが大分遊ぶさうだナ、遊ぶも宜いが偶にやアは仕事も仕なけりやアいかぬ」　二「マア仕事の一件に付いて少し危ねいことが出來た！」　其「何が出來た、手金でも取ッてそいつを何か、使ッてでも仕舞ッたのか？」　宗「マ、マアその形だ、ドウも兄貴だから話をするが酷い目に遇ッたヨ」　其「ドウした？　話しな」　二「ち

やアマアチョイと心配して呉れる人だかち話をするが、此の間その備前様の家來でナ、エ、古田に本間と云ふ二人が家へ來た、そいつは餘ッぽど前のことだ」　其「ハ」　一「その殿様の好みで隅田川乘合船の小柄を頼まれたが」　其「フム」　一「小柄に隅田川へ今往ッてさうして其の圖は是れが善いと云ふところを見てろいつを直ぐ下絵を附けて此處に居る宗珉が彫るんだ」　其「ハヽア、此の頃はまた大名が贅澤になッた、ドウしたエ、それから」　一「マア聞いて呉んねい、手金を百両呉れた」　其「大層な仕事だナ」　一「ナニこれは仕事に呉れたちやアねい、宗珉と一蝶の顔へ遣ると斯う云ふ話だ」　其「宜い顔だ、手前達の顔は一、百両と云ふ顔ちやアない、二匁八分ぐらゐの顔だ」　一「始めたナ、兄貴戯談ちやアねい、二匁八分と言ふ顔があるかい」　其「ドウしたそれから？」　一「チョイと江ノ島鎌倉へ往ッて始めて大金を持ッたから遲く

なッて」　其「極まを言ッてらア、お前達の母親は心配したらう」　一「大心配、そこへ歸ッて來た」　其「歸ッて來てドウだ？」　一「話と云ふものは案氣ぢやアねいか」　其「何が話か案氣だい」　一「三百両呉れる手金を百両渡して是れ〳〵と殿様にナ上げたからろれは手前共が善くない名人と云ふ名のあるものに手金を渡すなどゝ言ふことはないと大變叱られたさうだ」　其「そこで跡の二百両來たらう」　一「フム、二百両來た、己れにばかり話させて宗珉言はねいか」　其「マアドッも茅場町の兄貴飛んだことをしましたヨ、そいつにソレ手を出したんで」　其「博奕か己ア他の事は小言は言はねいが博奕はいかねい、博奕はドッも名人だとか人に言はれて居る者が遊女買した、藝妓を揚げて幇間を喚んで裸体になッて勘定をして來たと云ふのは是れは職人では搗はないが博奕をして取られるなんて」　宗「魔が魅してチョイと手を

出したので氣の毒なのは一螺ヨ、當人は餘り好まぬいけれども已れがやるから一緒にやッて取られた、スルと已れが取返さうでトウトウ取られて仕舞ッて明日はその小柄を納める日なんだ」其「フム」宗「歸りやア歸ッて來るとお前此の一螺の母親がこれから首を縊ると云ふ騒ぎ」其「フム」宗「それからマア色々な長い話があるけれども掻摘んで話す、親と云ふものは子が可愛いもので五両取ッてある、其の五両を借りて地金を買ッてトウ〳〵マアスッカリ圖を描ッてさうして今夜徹夜をして明日の正午までに役人が來るから間に合ふやうにして呉れと斯う言ッて出て往ッた」其「フム、ドウしたエ」宗「ドウしたッてドウも危ねい思ひサ、二人の首は無くなるところだッた、向ふの其の役人の悪合にやア明日の正午までに小柄が出て來て居れば宜し、小柄が出來て居なければ三百両の金を耳を揃

へて返せ、ろの三百両が揃ッて居なければ二人ながら首を持ッて往くと斯う云ふた、何ぼ何でも首を持ッて往かれちやア不自由でいかねい、そこでマア色々心配したんだが兄貴見て呉れ、出來たヨ、ドウせその三百の價値は無いが肝しマア善く出來た積りだ、ドウだい見て呉れ」其「ハヽア、ドレ見せナ」と其角が取上げて見ると隅田川の景色の小柄でございます、乘合船の圖が宛然ドウもその正物を見る樣」其「フヽヽムー お前達はマア人間は仕方が無いがさて筆を執り鑿を持ッては立派なものだ、是れを是れから家へ持ッてッて?」一「ン、母親に見せて明日正午に來るまでに、納めて仕舞やアそれでマア宜んで」

第十六席

少時考へて居たが其角はドウ思ッたかクル〳〵ッとその風呂

數へ包んで懐中へ納れた　一「兄貴、戯談しちやアいけない」其「宜いから已れと一緒に來い」　両人「何處へ？」　其「宜いから來な、附いて」　一「宜いッて何處へ？」　其「何處だッて大に世話だ」ス〳〵吉原の方へ往くから二人は慌いた　一「何だッて小柄を見せたんだ」　宗「見せたッて話をすりやア見せずにやア置けねい」　一「兄貴、何か心得違ひしちやア居ねいか」　宗「茅場町の兄貴萬望だ」　一「また交際ふけれども今日は急いで歸ッておッかアに此の小柄を見せにやア親母が安心しねい、歸ッて來るまでは首は縊らぬいと言ッたが餘まり遲くなるとさうでもねい縊れて仕舞やアしねいかと」　其「さうでねい、己れの氣に入らねい、お前達が氣に入らないぢやアねい、お前達はドンなに亂暴しても兄弟分だから」　一「ぢやア何にが面白くねい？」　其「今話を聽きやア何だ、明日の正午までに小柄が出來て居りやア善し、出來て

居なけりやア三百両の金を返せ、其の三百両も揃ッて居なけりやア二人の首を斬ると備前の家來、今度の掛りの役人が言ッたのか？」　両人「さうヨ」　其「それが氣に入らねい、明かに明日の正午までに出來て居なけりやア善惡に拘はらず二人の首を斬るぞヨと言ふなら武士だ、そいつをお前達に錢が無い、貧乏人だと思ふからして品物が出來て居なけりやア金を三百両寄越せ、金が揃ッて居なけりやア首を斬ると云ふのは、ドウ云ふものだ、まだそいつをお前達が恐入ッて小柄を拵へると云ふのは面白くねい、それぢやア乘人に名人だと言はれる名譽を汚す、日明日其の金を返して遣れ、金で宜けりやア來たときにマア誠に氣の毒様でございますが誂への品が出來ませぬ、あなた方が仰しやッた通り三百両の金が揃ッて居さへすりやア仔細はございますまいから返濟いたします、請取ッて下さいと、小粒だか何だ

か知らねいが請取ッた金を其處へチャンと列べて置いて、ドウぞ之れをば持ち下さい、失禮でございますがに酒を一ト口飲ッて下さいと言ッて出せ、利と言ッて出してもそりやア先方で取る氣遣ひは無いから、何かそのピックリするやうな料理を其處へ出して置いて、金が無けりやア貸して遣る、太い奴だ、その本間とか古田とか云ふ奴は」　両人「兄貴さう怒ッちやアいけねい」

其「そりやアお前達に金を貸して遣る、立派に」　両人「ドウして？」

其「何故？　此の小柄を三百両に買ッて貰ッたら宜いぢやアねいか」　一「ドウもそりやア買人があるめい、ドンなことをしたッて是りやア金一枚より餘計にならねい、相手が備前様だから」　其「備前様でも備前徳利でも何でも宜い、何だ己れが承知しねい」

宗「其様なに茅場町の兄貴怒ッちやアいけねい、怒るくれねなら己達を怒らにやアなるめい」　一「ところでそれぢや兄貴お前そ

の金を懐中に持ッて居るか？」　其「己ア百両も有りやアしねい」

両人「何處へ往く」　其「何處へ往ッても宜い、ドウも武士らしくねい、金を返せ返さなけりやア首を斬るなんてンョッたれたことを言ふ、手前達は危ねいと思ふか知らんが、何を恐れることがあるか、其様な了簡ぢやア交際しねい、三百両遣れサア寶井其角が承知しねい」と吉原土手で大きな聲をして威張ッて居るから二人は驚いて「何處へ往く？」　其「何でも宜い、此方へ來い」と言ひながらドン〳〵出て往く　其「オイ一蝶來い」　一「ダッて兄貴、惡いだからをしちやア困る」　其「惡戯ぢやアねい」と言合ひながら後から尾いて參るうちにこの吉原へ遣入りましたが、其の時分に七軒の揚屋でございまして尾張屋清十郎方へ參りました、何で尾張屋へ來たかとヤしますと、此の尾張屋清十郎の所へ彼の有名なる紀伊國屋文左衛門が來て遊んで居ります、それゆゑ其

角が是れからその一蝶宗珉の二人を連れて紀文の前へ出て話をする、ところで此の小柄を文左衛門が買上げたる一條よりして却ッて紀伊國屋文左衛門が備前家から一つの怨みを受けまする淫話に相成ります

第十七席

此の紀伊國屋文左衛門と云ふ人は看客諸君も御存じの通り有名の人でございます、隨分吉原には大分の金を落したもので、能くアノ一代に身上を拵へて一代で潰した樣に申上げます同業者もございますが、これはその全く初代文左衛門の拵へました のが百万両からあッたので、二代目文左衛門は俳名を千山と申しまして其角の社中でございます風流もあり、かた〳〵したがドッ云ふことか二代にして其の身代を失ひました、何かその文

左衛門は餓死をしたなど云ふことを申す者もございますが、決してさうではなく、縱令ドンなに成りましても紀伊國屋文左衛門で、マサか道路に斃れる樣な事はない、深川に幽居をして終に病死いたしましたのを雲光院と云ふ寺へ送葬ましたから、雲光院にその歴然と初代も二代も墓がございますそれで此の紀文と云ふ人は吉原の大門を七度閉ちました、昔は大門を一度閉つのには千両と云ふ定限がございました、一度夜大門を閉ッてさうして妓幇間を總揚をして騒ぐ、それに付いては殘らずの遊女屋其の他茶屋に至りまするまで相當の手當をするのに千両掛ッたと云ひますから、マア今日で云ふと一萬圓位も掛りませうか、それを七度やりました、或る雪の降るときに節分の遊びをすると言ッて、桝の中へ小判を入れ、それをその仲の町の往來で撒いて妓幇間に拾はせましたが善い心持でございませう、

降る雪の中で、金を撒いて幇間や藝妓が拾ふところを見て居たら、けれども昔だから其様なことが出來た、現今では幾らドウも大金があッても往來で金を撒いて遊ぶなんてことは決してその警察で許しませぬ、天下の寶を撒いて人に拾はせるなんてことがドウして出來るものぢやアない、其の時分には別に規則と云ふものも無し、未開の時でございましたから、金さへあれば自分の金を撒いて遊ぶのは差支ないと言ッて撒いた、今日金を撒いて遊んでも政府の察當を受けませぬなら燕林も少し撒いて見たいと思ふ、ドウも今では危あいから撒かないが、替い心持でせう撒いたら、が其様なことがあれば燕林は拾ふ方へ廻る、其様な了簡だからいけませぬ

第十八席

デ吉原に大盡舞と云ふのが殘ッて居ります、此の大盡舞に付いては現今でもその紀文の名前があります

抑音曲の濫觴は高麗唐土は知らねども今日本に隱れなき紀伊國文左止めさす、紀文大盡張合ふて三浦の几帳を身受する、緞子三本紅絹五疋、綿の代まで相添へて揚屋半次に送らるゝ今に半次が寶物、サヽホヽ次の大盡見いさいな

と云ふて明治の今日になっても文左衛門の名前は朽ちませぬくらゐ仲ノ町の尾張屋清十郎の家が馴染の茶屋でございまして始終此家へ遊びに參り、三浦屋の薄雲と云ふのを敵娼にして居りました、勿論他にもありましたが、一番モウ此の薄雲が氣に入ッて居たと見ます、デその吉原へ參りますときには始終文人でございますの劍術遣だの其の當時江戸で有名な者を五人でも十人でも必ず連れて來ると云ふのでムいますから物の要

ることは酒大でございます却説今日も茅場町の其角を迎ひに遣って酒を飲んで居りました、其角は紀文の迎ひと聴いて早速に船で参り山谷橋へ上るのを何か買物があったと見て、今戸橋らか上ると、前席へ上げまする通り一蝶と宗珉に逢ったのでございます、其角はドン〳〵尾張屋清十郎方へ這入って往く、一蝶宗珉は何せい裝が穢ないのを搏はず吉原へ連れて来られたものですからナカ〳〵這入らぬと云ふ様子　其「兄弟分、其處に待って居て呉れ、チョイと二階へ往って来るから」　一「兄貴、戯談ぢやアねい何處へ往く、小柄を歸して呉れ」　其「賢るんだ」　一「賢るッてナニ賢れやアしねい」　其「宜いから其處に居な」と言ひ捨て表二階に参るとモウ大分割間や藝妓も來て居る様子　文「ヤ、宗匠餘ほど酔って居る！」　其「エー遅なはりまして誠に恐入りました」　文「宗匠ぢ入來か、イヤドウも急に迎ひを上げて済まぬけれども今夜は歌仙を催すに付いて文臺を宗匠にお願ひヤすりで實は迎ひを上げたが」　其「ア、さうですか、エーまた斯う云ふ遊里の歌仙も別段でございますせう、皆さんぢ免なさい、就いて旦那様にぢ願ひがございます」　文「何で？」　其「エ、私の兄弟同様に致して居ります友達で英一蝶、横谷宗珉」　文「ア、成るほど」　其「連れて参りましたが一つ會ッて下さいますれば難有う存じます」　文「それは善い先生を連れてぢ出でだ、疾うから私もドウかその一蝶宗珉と云ふ人達と一度同席をしたいと思ッて迎ひを上げたこともあるが両先生共に生憎用があって來られなかった、ぢ同道かい」　其「エ、唯連れて來たのぢやアございませぬ、實は斯う〳〵斯う云ふ譯で」　文「フヽム」　其「私がソレ止めたです」　文「止めたとは？」　其「エ、小柄を彫ッて是れを納めると云ふから、それはその名人と云ふ肩書を取ッて居る者の爲ることでない、相

手が大名で最初から首を斬ると云ふ樣な厳しいことを言ふのが是れが武士だ、それを金が出來なけりやア首を斬ると言はれたら金で私は返したら宜からうと斯う思ひます」文「成るほど」其「品物は迚も三百両と云ふ價値はございませぬが、旦那樣のことでございますから、ドウぞ一蝶と宗珉に三百両遣って下さいまし、スルと此の小柄は旦那の手へ納めて、明日來る役人の前へ職人は此のくちゐなものだ、今裸体で居ても三百両や五百両の金は直に出來る、金で善けりやア早速返しやすと明日備前樣の家來が來たら小判で列べて返させやうと思ふので」文「これは面白いナ併し小柄も拜しやうし、ぼ二人にも昵近になりたい」其「ドウかさう云ふことに願ひます、エー此の小柄で出來はドウも極善しうございます」

第十九席

其處へ差出した小柄をば文左衛門少時見て居たが「ウ、ム、旨いものだナ、鑿の味と云ひ、またこの下絵の工合は宛然隅田川の今日の乗合船の光景だ、エー早速是れは私が買ひませう」其「難有うございます」文「金子は値かのことだから、ドウか一つ此席へ喚んで下さい」其「それは何よりエー下に穢ない裝をして居る二人をドウぞ此處へ喚んで來て下さい」「畏りました」と女中は階下へ降りて往って見ると宗珉も一蝶も穢ない裝、大人ではあるけれどもドウも今のところでは大人と言って居られませぬ、取別けて一蝶は母親がさうでもない自殺アしないかと思ふからドンなにか心配だ　女中「サア〜此方へ上んなすって、茅場町の宗匠が左樣仰ッしやいました」一「ドウも濟みませぬ

けれども茅場町の宗匠を此方へ喚んで下さい、急いで歸らにやアなりませぬから」　女中「さうでもございませうがチョイとマア二階へ上がって入らッしやいナ」　宗「往かうぢやアないか」　二「俳し家が心配だ」　宗「紀文の旦那ならお前も私も二三度ソレ迎ひを寄越されたが丁度沒目に掛れなかッたが、アヽ分った是れは事に依ると彼の小柄を紀伊國屋の旦那に買ッて貰ッて其の金で備前様の家來に返せと言ふこッちやアねいか」　二「ナンぼ紀文の大盡だッて素銅の小柄を三百両ぢやア買ふまいテ」　宗「いつ飲ませて五両か三両で買はれた日にやア仕方がねいなアヽマア、往ッて一つ兄貴の様子を見やう愈々となッたらドウせ仕方がねい、兄弟義絶だ、兄貴を打擲れ、お前が打擲りやア其の間に懐中に退入って居る小柄を引ッたくッて仕舞へ」　二「さうも出來ねい」　女中「サア沒上んなさい」　両人「今上らア」　二「だから兄貴に話だけして見せなけりやア宜いに」　宗「エヽ、仕方がねい、往け〳〵」　さうなると宗珉の方が幾らか年上だけあッてズンズン上がッて往く、後から一蝶が上る、案内に連れて廣間へ來るとドウも立派な座敷で、三四十人藝妓幇間が騒いで居る。正面に文左衛門、片脇の所に其角が居ります　文「サア此方へ沒出で、何だヨ、名人になると斯う云ふことはある」　其「此處に沒居でなさるのは紀伊國屋の主人様だ、挨拶をしねい、エー此方が英一蝶で此方が宗珉でございます、ドッかまた手前同様に」　文「イヤ、先生方、私は文左衛門だ、日外チョッと迎ひに上げたところが生憎沒不在で」　宗「ドウも初めて目通りを致します、横谷宗珉でございますが何分また沒最負を願ひたうございます」　二「エー、英一蝶でございます、就きましては旦那様、始めて目通りをして斯う云ふことを申上げては濟みませぬけれどもドウぞ旦那様

から其處に居ります其角に一つ小言を言ッて下さるやうに」宗「ドウも惡いたづらをする人でございます、私がチョッと預けて置いた物がございます、ドウかそれを直に返して呉れまするやうに」文「ハヽ、誠に此の茅場町の宗匠は面白いことをする」宗「エヽ、面白過ぎます」文「先づ一杯飲んなさい」二「エ、今日はその何分咽へ通入ませぬ、誠に何でございますがドウか一つ」宗「一蝶、其樣なことを言ッたッて仕方がない、サア紀伊國屋の旦那の杯を」二「お前他人の母親だと思ッて、さう冷淡に扱ふ」宗「斯うやッて出來て見れば代は向ふの物、品は此方の物だ、別に已が不實なことを言ふ譯ぢやアねい、折角その杯を下すッたから受けないか」二「受けるけれども、ドウか一つ其角に仰ッしやッて下さい」と頻りに心配をすれど其角はニコ〳〵笑ッて居る

第二十席

文左衛門は兩名の顏を見て居たが　文「ハア、ヤ實に職人と云ふものはそれがエライのだ、斯う云ふ所へ來ても自分の言ふだけの事を言ッて世辭を言ひあさらないから私は好きなんだ、人と云ふものは無暗に世辭を言ッたり氣に入るやうな話をして取入らうなんて言ふ人に限ッて縱令畫工でも職工でも名人と云ふ名は決して取れない、ヤ氣象が善い、エー一蝶先生は心配なさるな、今其角から聽きました、小柄は此の文左衛門が買ひませう、さてその買うんですがろこがムツかしいです、ドウか何でございます、迚もその宗匠が話をした價値はございませぬ、イヤ品物に望みはあるませぬが唯英一蝶横谷宗珉と云ふその名前を買ひます心配の樣だからマア安心の爲め斯う云ふろの酒

の席で金子を扱ふのも失禮の譯ですが金子を渡しやしませう」　一「ドウも難有ゥ存じます、ドウかそこどころを、オイ宗珉何とか言はないか」　宗「相濟みませぬが旦那樣ドウかそれを賜ひたう存じます」　文「承知しました」始終文左衛門は當今で云ふと會計方茂兵衛と云ふ者を連れて居ッたさうです、其の茂兵衛に耳語を致しました、茂兵衛が階下へ往ッたかと思ふと若衆が二人昇ッて參りまして、ソンなに大きくもない箱だが一蝶と宗珉の前へズンと置いた。二人が見ると驚いた　一「オイ〳〵」　宗「エー」と袖を引いて囁いた　文「是れは法だ失禮だが少名前を買ひます、ドウぞ一ト箱で賣ッて下さい」　一「一ト箱ドッだい宗珉」　宗「己れも驚いた、一ト箱は恐入ッた」　文「デその金子を持ッて歸んなさい、おッかさんの安心するやうに、今御箱を拵へますから、一旦家へ歸ッて私は孝行が好きだ、お前さん方

は誠にエライところがある、一蝶先生、おッかさんに金を見せるやうに今夜は家へ往ッて、少寢なさい、さうして其の金を前へ置いて、チー明日その本間とか古田とか云ふ人が來たら豫て言ふ通り品が出來ませぬから三百両少返しやしますと両先生が列んで居て立派に返して遣るが宜うございます」　両人「難有ゥ存じます」　一「おやァ宗珉、此金を持ッて往ッて呉んな」　宗「宜しう言ッて宗珉は千両箱へ手を掛けて懐中へ納れやうとしたから文左衛門は噴き出した、ナカ〳〵千両箱が懐中へ這入るどころか持上りもしない。其角も其席に居て「ドウだい、備前樣などが大層なことを言ッて愈よ言ふどころへ來りやァ先づ紀文の旦那にやァ敵はぬ、千両で小柄を買ッて下さるなんて」　両人「誠にドウも兄貴、大したものだねい」さう斯うして居るところへ吸物膳が出て來る、二つ三つ酒を飲んだ」　一「サァ今夜は

暇をやさう」　文「ア、おッかさんも心配して居なさる樣子だから一旦歸って明日午後になったら直ぐに此方へ來て下さい二人揃って、デ斷って置くがドウぞ二人揃って來るときは少しばかり金が遣入ッたからッて餘程光る着物を着たり何か支度して來て下すッちやア面白くない、ドウぞその着物で」　二「エ、此の着物は光ります」　文「それはその垢で光る、明日笑ッて酒を飲ませう、今日はほ心配の樣だから明日ドウぞ先生方二人で」　兩人「難有う存じます」　其「私が此の二人を連れて參りましたのは是非とも旦那に此のことは願はうと思ひまするところ、早くも千兩と云ふ金子を下さいましてモウ大きに安心いたしました、ぢやアナンだ一蝶、宗珉直ぐに是れから、袈籠も今に來る、袈籠が來たらそれへ乘って」　兩人「難有い」とイヤドウも二人は喜ぶこと限りなさいませぬ。其のうちに袈籠が出來たと云ふので大門外から袈

籠に乘りました、金子はチャンと二人に吩付けましたナカ〳〵千兩箱はチョイとぐらゐは持てますが、こいつを持って五町の十町の歩けるものではございませぬ。さて家へ歸って來たのは夜の五ッ少々過です　一「おッかア唯今歸りました」　二「おッかさん、今歸りました」佛壇に向ひまして母親は頻りに看經をして居たが　母「一蝶、お歸りか」　宗「おッかさんや、喜んで下さい」　母「オー、宗珉さん」　二「母親、誠にドウも濟なかッたが、色々な話は後にしてサア之れを見て安心して下さい」と千兩箱を其處へ置いた」　母「オヤドウした？」　宗「エー、今色々話をします、袈籠昇を歸して仕舞ッて」と其の金を持って來て呉れた人と袈籠昇に相當の代を遣ッて歸しました

一「サアおッかさん斯う〳〵斯う云ふ譯でございます」と搔摘んで話をする、母親はそれを聽いて居たが　母「さうかい、マア話には聽いて居た紀文の旦那樣、チョイとしても其の旦那が千兩の金を出して二人を助けて下さるとは誠に結構なことだが、是れは宗珉さんや、一蝶、お前も餘ッぽど氣を付けないといけないヨ、浮大名と云ふものはナカ〳〵その依估地なものだから、モウ斯うなると事に依ッて紀伊國屋の旦那が備前樣の浮惡しみを受けるやうなことが出來るかも知れない、浮依頼になッたものを拵へて縱令金づくとは云ひながらツクヅク紀文が買ッたと云ふことを聞いたら大方備前樣の浮怒りがあらう？」　宗「其樣なことをおッかア此處で言ッたッて仕方がねい、ほ怒りがあッたところで向ふ同士、明日來たら此の金で返して、さうして備前樣の方は手を切るだけだ」　一「ナニ、ソンな心配はしなさんな、そり

やア茅場町の兄貴も言ッたが、最初から出來なけりやア首を斬ると言ふなら分ッて居るが品物が出來なけりやア金を寄越せ金も出來なけりやア首を斬ると云ふのは餘まりだ、金が出來なけりやアと云ふところは此方の無いのを附込んだ口上何拵はねい」とは二人が言ふもの、大層母親は心配しましたが、其の晩は笑ッて横谷宗珉も泊り、トウ〳〵飲み明しを致しました、幾らでも飲める、千兩箱が側にあるんだもの。翌日午刻少々前になると「頼む〳〵」　兩人「來た來た」モウ今日は景氣附いて居るから横谷宗珉が「ドーレ」ドーレもないものだ其處に居た癖にして　久「コレ、は先生方在宅かい」　兩人「ヘー浮待ちヤして居ますまた、サア此處へ浮出でを」　久「イヤ、さてドウも此の度は度々出入を致し甚だ手數を掛けて相濟まぬことと彼の乘合船の圖は至極善しからう今日は樂しみにして參ッた、宗珉先生は座睡をし

て居なすッたナ、船の中で」宗「ヘー、貴方知ッてるですか？」久「存じて居る」宗「オイ一蝶、古田の旦那は知ッてるさうだ」一「知ッてる〳〵、宗珉が座睡りをして居たのをドウして沙存じ」久「ソレ、卷羽織を致して仲間を一人連れて船の中央の所に立ッて居たのは拙者だ」一「ヘヽヱ……、オイ〳〵、ナカ〳〵先方もスカサないなア」宗「シテ見ると何だ、先方でもチャンと手配りがして あッたと見える」一「旦那ですか、アノ花賣の荷の脇に立ッてゐ居でなすッたのは」久「アヽ、笠が深いから顔が知れまい」一「さうでございましたか」久「出來して居ますませうナ」一「ヘエー」久「イヤサ、依頼いたした小柄は出來て居りませうナ」一「それが出來ませぬ」藤「出來ない？」宗「ヘー誠にドッも相濟みませぬけれども沙約束通りに致します」久「約束通りとヤすと？」宗「ヘー〳〵」一「日外旦那が仰ッしやいましたヤ、エー當日に小柄

が出來て居れば宜し、出來て居なければ三百両の金を揃へて置け、三百両の金が出來なければ二人の首を斬ると仰ッしやいましたらう、さうでございますませうナ」久「如何にもさうだ」一「エー、本間の旦那さうでございますませうナ」藤「アヽ、それに相違ない」一「ですから私共が仰ッしやッた圖を描らうと思ッてモウ此の間から毎日〳〵隅田川へ往ッて船に乘ッて見ましたが善いドウも氣に入りましたところがございませぬ、ト言ッて此方の想像で描いた圖では役に立ちませぬ、昨日までモウ彼のくらゐ私共一生懸命やりましたが、ドウも是れと言ッてナンです、エー小柄にならうと云ふ圖がございませぬで出來ませぬから、それで沙約束通り金子を沙返しヤさうと思ひます、此處に小出しの金が揃ッてございます」久「大仰なことを言ふな」宗「ドウ〳〵此の千両の内五百両でも三百両でも貴方が持ッて往けるだけ沙持

ちなさい、旦那様方へ利と言って差上げましても済みませぬから酒を一杯上げたいと存じます、ドウか此の内三百両持ちなすッて下さい」と千両箱を二人の前へズイと押出した、

第二十二席

これを最前から聽いて居りました本間藤十郎は久右衛門の顏を見る、久右衛門は本間の面を看て居たが　久「コレ〳〵先生、それは困るテ、モウ大守が今日はそれが必ず出來をして居るに相違ない、早く持參をするやうにと、唯今參る時にも仰せがあッたくらゐ、ト云ふは昨日立歸ッて實は一蝶、宗珉の二人が頻りに苦心を致して始終その船を見て居りまする樣子、丁度手前乘込んだ船の圖を取ッた樣でございますから、誠にこれは面白い圖が出來ましたでございませうと斯う申上げると、上に於ても是非早う持參をして喜ばして呉れと云ふこと、それゆゑ別限は少々早いが我々共両人出張いたしたのであるから、ドウぞ出來て居るなら小柄を貰ひたい、金子ならば別段にそれは役に立たぬから」　宗「ヘヽエー旦那様先と違ひますナ、ろれは、武士は舌を二枚に遣はぬもの小柄が出來て居なければ金、金が出來なければ首と仰ッしやッた、それで金子を三百両は返済申すと斯う云ふんです」　久「ハア、さうでは無からう、小柄が出來て居るんだらう」　宗「左樣です、チー出來ました」　久「出來たら小柄を渡して貰ひたい」　宗「小柄は賣ッて仕舞ッた」　久「賣ッた？」　藤「コレ、我々共両人が出て約束をして置いて拵へ上げたる小柄を他へ賣ッて相済むか」　宗「エ、ろれはその先の約束でそれから後に貴方何と仰ッしやいました、品物か金か首と仰つしやいましたらう、ですから第一の品物が出來ませぬゆゑ第二の金をば返しヲすと言ッ

たら分ってるぢやアございませぬか」宗「拵へたのは此方の手で拵へたので」藤「幾らに賣ッた」宗「エ、それはまだナンでございます、價を善く賣りました」久「價を善く賣ッた？」一「ヘー小柄の價ぢやアございませぬ、宗珉と一蝶の名前と顔を買ッて呉れたんで、ヘー本材木町の紀伊國屋文左衛門と云ふ人が買ッて呉れました、エ、紀文でございます、千兩に一蝶と宗珉が合作の小柄が千兩ぢやア安い、備前様は三百兩と仰ッしやいますが、また ドウも町人でも百萬兩の身代で紀文なんて豪氣です、且那様の方は別には不都合はございますまい、此の通り三百兩は此處に置きます、是れをドウぞ持ちなすッて下さいませ、乞、併し長く出たり這入ッたりして下さいまして誠にドウも相濟みませぬ、何れ淡緑がございましたら淡屋敷へ淡禮に參ります、ドウぞ殿様へ宜しく仰ッしやッて下さいまし、尤も江戸に居ります畫工、彫

刻師も澤山ありますから他の者に淡誂へを願ひます、マア英一蝶、横谷宗珉は以來は謝絶ヤ上げます」二人の武士はハッと思ひまた、成るほど先の約束が少し惡かった、出來なければ首を斬ると約束をすれば宜かッたが、それを出來なければ金をと言ッたのは大きに誤りでございます、とは言ひながら唯今に相成ッて金を持ッて立歸り殿へヤ上げれば必ず切腹仰せ付けられるに相違ない、小柄一挺から兩名の武士の一命に及ぼすやうなこと、本間、古田の兩名はムラ〳〵ッと致して既に柄へ手を掛け寧そのこと此處で一蝶宗珉を斬ッて切腹をしやうとまで一時覺悟をしたが、流石年を取ッて居りまする古田久右衛門イヤ〳〵三百兩の金を受取ッて立歸ッて此の次第をヤ上げて殿の處分を受けやうと思ひ、英一蝶、横谷宗珉に言ひ捲られ金を持ッて屋敷へ歸ッて參り、右の次第を逐一殿へヤ上げる　兩人「誠に手前共

約束の落度でございます、此の上とも御慈分を願ひたう存じます

「其の方ども落度はない、不届の奴は紀伊國屋文左衛門と申す町人、予が依頼いたした物を横取いたすとは悪い奴」と仰ッしやッて久右衛門、藤十郎に別段慈分もなく唯紀伊國屋文左衛門の横取を大層に悪しみなすッて。是れが間違の一つで文左衛門の了簡では備前様へも出入りをするから斯うして置いて此の小柄は自分が献上する積りで居た、それゆゑその買取ました小柄をば其の後改めて文左衛門より備前家へ納めました、納めたがモウその御紀念になッて御居でおさるから直ぐ文左衛門へ對して小柄を返しに相成り出入りを止めました、紀伊國屋文左衛門は知らぬ識らぬ千両の金を出したのが備前様をクビる基となり後に身代が倒れますときに是れが大層害になッたと云ふことでございます、併し是れは裏の御話さて二人の武士は歸る、喜んで一蝶、宗珉の二名は直ぐに其の裏でございまして仲ノ町尾張屋清十郎方へ參り右の次第を話をすると紀伊國屋文左衛門に於ては「マア〜それは善かッた」と言ッたが茅場町の其角は「ア、これは私が悪いことをした金で返すのは善いが二人に備前家の家來を凌辱させたのは宜しくない」と思ッたが今更ら悔いても六日の菖蒲、十日の菊で仕方が無いから其の儘にした。それから追々文左衛門の氣に入りまして一蝶、宗珉も始終紀文の側を離れず居りました、其の中に此の一蝶と云ふ人が朝妻船と云ふのを描いて一旦遠島を致されました、其の事は朝妻船の御話に移ッて申上げます

第二十三席

デ此の英一蝶が三宅島へ遠島をされたことがございます、全体

ろの遠島をされたときには、まだ多賀朝湖とヤした頃でございました、其の遠島が恩赦になりまして江戸表へ歸りましてから朝湖の名前は憚ると云ふところより、して一螺と改名を致したに相違でございますせぬが俳し『乘合船の小柄』では斷とヤしました通り多賀朝湖では人が知りませぬから、英一螺とヤ上げますので、其の邊はドウか愛讀諸君の恩見遁しを願ひたう存じます。此の一螺が始終紀伊國屋文左衛門の所へ出入りを致して居りましたが、或る時吉原の尾張屋清十郎方へ集りまするとと、亭主清十郎が其席へ出まして「エー、今日は先生方に少々歎願がございます」「何だい」清「エ、屏風を半後拵へましてございます、ドウか此屏風へ合作を願ひたう存じます」文左衛門が之れを聽いて「それは面白い、ドウか亭主が折角頼むのだから何か一つ描いて遣ッて貰ひたいものだ」一「承知いたしました」と言ッた

ところで銀屏風が半後しかございませぬ、一螺が一番先きに筆を執ッて夜櫻を描きましたが、至極ドウも善く出來た、イヤ清十郎は喜んだ、文左衛門も「是れはドウも其の道を褒めるのは失禮だが善く此の夜櫻は出來た」サア其の次はと云ふと其の頃芝神明前に居りまして後に呉服町へ轉宅を致しました書家でございまする佐文山、佐々木文山と云ふのでございますが落款には佐文山と致してこれは草書を善く致した人、丁度席に居りましたから清十郎が「ドウか文山先生恐入りましたが、此屏風へ一つ願ひたうございます」文山「今日はいかぬ」清「エ、ドウかは酔筆で宜しうございます、ドウか願ひます」文山「酔ッて居て宜ければ一つ書かう、エー大書を仕やう」清、ア、ドウも難有う存じます、また先生の大書は別段、何でも宜しうございますから先生の勢氣に向きましたものを一つ願ひたう存じます」文山「宜し

〳〵」硯や大筆の用意はしてございますと見ねて直に文山が屏風を其處へ擴げて置きまして、この大書いたすにはドウしても立ッて居なければ書けませぬ、大きな筆を持ッて硯の墨に暫らくの間含ませ　文山「何でも宜いか？」　清「エ、先生の勝氣に入りましたもので何でも宜しうございます」　文山「宜しい」屏風を見て居たが、筆を下してサヲ〳〵と書いた文左衛門を始め一同が其の書いたものを見るとビックリした、書くものに事を換へて其の銀屏風へ草書で

小便無用

と書いた　清「是れは先生チト情けないことに存じます、銀屏風へ小便無用は」　文山「いかない？　何でも宜しいと云ふから」　清「だッて小便無用はチト淫手荒いぢやァございませぬか」　文山「だけれども お前の家は斯う云ふ揚屋で隨分酔ッた客なぜが

あッて座敷へ小便を」　清「座敷へ小便する者はございませぬ」　文山「いかないかナ、折角書いたものを」　清「併し此の小便無用を座敷へ立ッて置く譯には行きませぬ」と清十郎は苦い顔をした側に居たのが例の實晉齋其角です　「宜し〳〵己れが一つ直して遣らう」と筆を執ッて屏風の上の所へ　『此のところ』　と書いて下の所へ　『花の山』　と書いた、それで

『此のところ』『小便無用』『花の山』

其「ドウか發句になりましたか？」　清「花見の景色か見ねます」イヤその時ドウも紀文が感心した　文左「ドウも茅場町の宗匠、實に句才が働いて居る、小便無用を消さないで花の山を附けたのは恐入ッた」と大層喝采を得ました

第二十四席

此のとき藝妓幇間も二三十人來て酒を飲んで居る傍の所に女の扇があります、商賣柄ですから一蝶が何か描いてあるかと思って取上げて見ると其の女扇に描いてありましたのが、柳が一本描いてあって其の脇の所に船が半分見ます、船の舳の所に美人が一人踊んで居ますのが水干に折烏帽子を戴き、金の帶を背負ひ太刀を佩いて居りまして、皺を肩へ斯う上げて居る、其の傍に頭髪を冠束巻に致して大層美なる服を着用致した人が采配を斯う持って居る圖でございます、至極面白い圖でございますから、少時見て居たが

一「ハア、是れは面白い、此の扇は何人の扇だエ、モシ此の扇は誰の扇だナ」と二三度問いたが誰も返事のしていが無い

一「餘り圖が面白いから二三日借りますヨ、其の代りヤア已れが何か描いて上げるが是れは拜借しますヨ」と斷ったが誰に斷ったとも無く唯大勢の中で一言言って其の

後歸りましたが其の時分には浪花町から両國米澤町三丁目、當今彼の加賀屋と云ふ蕎麥屋があります、彼の横町に移った頃であります、家へ歸って來ると書に熱心の一蝶でございますから、其の扇子を取出して見るとドウも餘はどその柳の蔭に船が浮んで居て乘って居る者の圖が面白いものですから至極氣に入って描寫て居た。ところへ寶井其角が來ました「居るかい」其「ア、宜し宜し、喚ばなへ、宗匠でございますか、二階に居ります」

くっても二階へ往く」と言ひながらトン〳〵トン〳〵階段を上って來たが

其「イヤ今日は仕事かエ」

一「ア、コレは兄貴、エー此の間は大きに失禮をしました」

其「何をして居るんだ」

一「ヱ、今そのチョイと下繪を描て居ります」

其「ア、さうかい、就いてはお前に話があって來た」

一「何です？」

其「今度紀文の旦那が奥州松島の景色を見に往く、ヤアその三十人ばかり往くからお前も

連れて往きたいと言ふんだがドウだい往くかい、豫て松島の景色を見たいと云ふことを言ッて居たが？」　一「さうですか、私もその松島は一度往ッたことはありますけれども旦那の供で是非往きたい、けれども この四五日母親か少し加減が悪いのを置いて往く譯にも行くまいと思ひますから、ドウか旦那に宜しく」　其「ア、さうか、宜し宜し、強ッて連れて往くと云ふ譯でもない、殊に母親が病氣なら仕方がない、ぢやア旦那にさう申上げやう」　一「ドウか義兄さんから宜しく仰ッしやッて下さい、後腹立がございませぬやう」　其「何其樣なことを思ひなさるやうな人ぢやアない、お前がその親孝行だと言ふので大變喜んで居る、何の下繪を描て居る？」　一「エ、此の間拾ッて來た扇があります、其の扇の圖を寫したいと思ッて、ドウです面白い圖ぢやアございませぬか？」　其「ウン、成るほど、これは面白い圖だ、ドウだい一

蝶、お前も苦しがッて居るんだが、こいつを一つ板に起して賣物にしたら宜からう」　一「へー、けれども賣れますまい」　其「ナニ、賣れないことはない、此のくらゐの圖は澤山無い」　一「それにやア何とか名が無くちやアいけませぬ」　其「ン、己れが名を附けて遣る」と言ひながら筆を執ッて假名で「あさづまぶね」としました　一「へーあさづま船！　面白うございますナ、ぢやア是れを一つ繪草紙屋へ話をしませう」　其「ア、さうして一つ幾らか錢儲けをしたら宜からう」と言ッて其角は歸りました。一蝶は直に懇意の繪草紙屋へ話をすると、其の時分にドウも一蝶の畫と云へばナカ〳〵その出板などは致しませぬ人です、それが今度板を起すと云ふことですから、ウヤ大分ドウも買人がありまして兩國の米澤町に土田屋と云ふ家がありました、是れは大きな繪草紙屋です、此土田屋からそれを出板をしましたが、あさづま船に決

して肉筆はでざいませぬ、何れも板に起したものですから、サアられが出來上って賣出すと賣れるのナンノと言って「ドウも今度一蝶が書いた朝妻船、ありやア大層に善く出來た」と云ふところから、實にドウも意外の利を占めました

第二十五席

スルと或日の朝のことです、母親と對座で朝飯を食べて居る、ところへ馬喰町の板新道に居りました七兵衛と云ふ手先で、此人は マア南北に出入りをして板新道の七兵衛と言って、乾兒の四五十人もあり、先づは手先では其の時分に一と言はれた人で乾兒を一人連れて來まして　七「先生居るかエ」　一「エ、コレは板新道の親分ですか、ぱ早うでざいます、何方へ？」　七「ナニ、お前の家へ來たんだ飯が濟んだらチョイと一緒に往って貰らいてもん

だ」　一「ヘー、何か用ですか？」　七「ぱ用だが何も心配なことは無い、玄關の役人方が入らしッてチョイと聞合せることがあるから喚んで來いと斯う云ふんで、何も心配しなさんな」　一「さうですか」と言ッたやうなものゝ餘まり名主の玄關や自身番は著い所ぢやアございませぬ、今日でも警察からチョイと來いなんて言ふと何だか心持は悪いもの一蝶は「承知致しました、エー供致しませう」　七「ン、直に往ッてくれ」　母「親分ぱ早うでざいます」　七「ヤ、おッかさん何時も壯健で宜いノ」　母「エ、此の頃は身体が悪くていけませぬ、何でざいませう怪を喚びには入來になりましたのは？」　七「ナニ、ムヅかしいことぢやアなからう、書のことで何か聞合せたいことがあると仰ッしやる」　母「さうですか、一蝶お前ぱ用濟になッたら直に歸ッとくれ」　一「エ、おッかさん直に歸ッて來ますぢやア親分ぱ供しませう」と羽織を引

被けて出て往く後姿を見て居る母親、其のうちに漸々玄關へ參りますると大勢列んで居りまする、旦那方が秋山藤九郎、山田幸作と云ふは両名、他に手先が七八人居ります、藤「七兵衛、當人同道したか」　七「へー」　藤「家主は出て居るか」　家主「ヱ、太兵衛とやします」　幸「ア、さうか前へ出ろ、前へ出ろ」　太「へー」　藤「英一蝶と云ふのは貴様か」　一「左様で」　幸「フム、生國は何處だ」　一「ヱー生國は近江でございます、私は江戸で生れましたが親共は近江の堅田に居りましてございます多賀ト庵とやする醫者でございます」　藤「ア、何か貴様の親父は醫者でト庵と言ッた者？　江戸へ參ッた」　一「左様でございます、餘はせ前に江戸へ參りましたさうでございます、私が江戸へ參りましたのは四歳の時でございますから、巨細は存じませぬ」　藤「フン、さうか、ヤ、アそれは其の邊で宜いが

ア、暫らく人形町通浪花町に居たナ」　一「左様でございます」　幸「それから米澤町三丁目當時居る所へ移ッたんだナ、それに相違ないか」　一「左様でございます」　藤「幾歳になる」　一「ヱー、三十二歳でございます」　藤「三十二歳か、母親が一人あるナ？」　一「左様でございます」　幸「幾歳だ」　一「ヱ、六十歳になります」　藤「六十歳になる？　偽ッてはいかない公儀では最前貴様のことに付いて伺存じであるから……」と言ひながら用箱を開いて其處へ出しましたのが例の朝妻船と云ふ繪でございます、藤「コレ、是れは其の方が下繪を描たんだナ」　一「左様でございます、ヱー手前が描きましたに相違ございませぬ」　幸「確と左様か」　一「へー」　幸「是れは心得があッて描いたんだらうな」　一「ヱ、別段心得と云ふのもございませぬ、望まれましてゐれから下繪を描ましたに相違ございませぬ」　藤「確と左様か」　一「へー」と叩頭をして居る

ところを幸作が目配せする、背後からドーンと一つ突かれたが、ックリ倒れる其のうちに「用」と云ふ聲が掛ッて忽ちの間に細が掛りました。ビックリ驚いた一蝶は「エー私は斯樣に沒細を戴きまするやうな不正な事を致したことはございませぬ」「默れ其の方は公儀を蔑ろにする奴だ」と一ト言仰ッしやッたいけでございまして、直ぐに茅場町の大番屋へ送りました。舊幕府時代には此の入牢を致します者は茅場町の大番屋か材木町の三四の番屋で送狀と云ふものを附けました、三四の番屋と云ふは材木町三丁目四丁目に大きな番屋がございましたもので今日で云ふと交番とは違ひますやうな所があッて此の二ヶ所で送狀が附きましたものです、直ぐに入牢と云ふことはなかッから藏いたのは一蝶でございます何で入牢をしたんだか唯「公儀を蔑ろにする奴だ」と仰ッしやッたいけのことで更らに分ら

ぬ、何れ藏のことに付いて尋ねがあッたら、尾張屋清十郎の宅で拾ッた扇を頼まれて描寫ましたと申上げやうと心得て居たところが喚出も何にもございませぬ、沒牢内へ入れ放しでございます

第二十六席

抑々何で是れは入牢をしたかと云ふと、さてドウもウッカリしたことは出來ないものです、自分の藏いた圖が知らず識らず斯う云ふその朝妻船と云ふのを藏いた、それで市中の取沙汰と云ふものは此の船の中に居るのは五代將軍家に相違ない、水干折烏帽子で皺を肩へ戴せて居る女は柳澤甲斐守の妻でおさめの方に相違ないと云ふことを流布いたしました、是れは全くさうではない、東山義政遊船の圖でございましたが、丁度其の頃ひは

柳澤一條で朝野共に喧しい時でございました、左れば將軍家の姿を畫いたと云ふところから、押へられたが全く一蝶に取りましては災難です、が吟味無しですから仕方がない、其のうちに一度白洲がありました、其のときに調べられて將軍家を畫いたら柳澤甲斐守の奥方を認めたらうと言へば將軍家の尊名を白洲でヤさんければなりませぬ、舊幕時代にはさう云ふことは禁としてあるました、依ッて吟味無し思召を以て英一蝶儀は三宅島へ遠島をヤ付けると云ふことになりました。驚ろいた英一蝶、何と言ッて願を上げても浮用ねがございませぬで、愈よ遠島と云ふことになりました此の遠島船と云ふものは永代橋から出まするし深川の万年橋からも出たものでございます、八丈、三宅、新島など、云ふ島へ送るました、勿論此の遠島船に乘りまする以上は浮船手の掛りになりまして船へ乘り込んで往く、浮船手

の役人は狀箱と云ふものを首に掛けて居ります、是れは何の爲めかと云ふと万一海上に暴風でもあッて愈よ此の船が行かぬと云ふときには送るべき罪人を船役人が專斷で切捨て苦しうないと云ふことを月番の浮老中から浮認めになッて渡された浮用狀でございますから、是れはその役人が首に掛けッ切りでございます、デその船には「流人船」と云ふ幟が樹ッて居ります、此の幟にもまた二タ通り幟がありまして、本字で「流人船」と畫たのと假名で「るにんせん」と畫いたのがあります、假名の方が輕罪かと思ふとさうではございませぬ、本字で畫いてありますが罪の輕い者を送りますときの船標で假名で畫いた幟の樹ッて居りますのが重罪でございます、是れはそのに船手のことを浮存と無い方があらうと思ひますから念の爲めヤ上げて置きます、又能く永代橋の際で親族の者に訣別を告げさせる

なぜと言ひますが、決して其様なことはございませぬ、萬年橋から出る船も永代橋から出る船も一旦鐵砲洲の河岸まで船を出ましして、其處で碇を卸しまして、暫時泊めて居りますうちに解船に乗って親子、兄弟、親戚が別れを告げに來るので、實に是れは目も當てられませぬことでございます、一蝶が乗って居りました船も一人ではございませぬ、丁度三宅島へ遠島を言付った者が十三人もありまして愈よ鐵砲洲の河岸へ其の船が止まりまするとと用意をしてありますする解船に乗って子供まで參ります、是れは勝船手の役人の慈悲で、全体船の底の方に假牢が出來て其の脇へ入れて置いて對面を願ひますと其處へ出して會はせる矣って歸る者は一人もございませぬ、皆な其處へ來ると正体も無く姿を見て泣きます、また罪人の方でもドウせ是れは生別れで無事で歸ると云ふことは少ないものでございますから、皆な袖を絞って泣聲は絶ねないくらゐでございます、入り代り立代り十三人の者の親族が來て面會を致す、就中一蝶の所へは一人も來ない、サアさうなって見ると縱令泣いても五人なり十人なり人の來て呉れる方が幾らか力になる、一蝶は熟々考へた、アゝ情けない、隨分兄弟分や友達もあるが、此樣な身体になったものだから誰も一人訪ねて呉れる者がないか、と思って胸を痛めて居ります

第二十七席

ところへシャ〳〵ッと解船を本船へ着けて上って來たのが實非其角でございます、役人に挨拶をして　其「兄弟居るかエ、一蝶は居るか」と云ふ聲に待って居た英一蝶「コレは、茅場町の兄さんですか」其「ドウした？、ドウもマアビックリしたヨ今度

の一件を聞いて……知っての通りマア紀文の旦那の供をして、奥州を何處と云ふことなく見物をして昨夜旦那も帰りになり己れも帰って聞くと今度の一件だ段々話を聞いて見ると朝妻船と云ふ繪を賣出したのが悪かったさうだ、賣れと言って勧めたのは己れ達、誠にドウも言譯がない」「ドッ致して、兄さんに此様な姿を拝覽に入れて済みません、段々く話を聴いて見ると五代將軍様が柳澤の奥方を相手に船遊びの図を畫いたんだと云ふ嫌疑ださうでございます、私は全く覺えは無いのです、併し吟味無しの遠島と云ふことになりましたものですから何處へ願ふと云ふ所もございませぬ、ドウか兄さんも身躰を大事にして下さい」其「ン、紀文の旦那も大分心配して方々へ手を廻して見たところがモウ今日になっては仕方が無い就いてはモッと早く來るんだが少し遅くなったのは米澤町の家を鎖ッた」「

へェ……」其「さうしてお前の母親は已れが引取ッて茅場町の家に離れ座敷があるから、其の方へおッかァは今移ッたんだ」「へエーさうでございますか」其「デお前に安心をさせやうと思ッて固より悪い事をしたぢやァない、唯繪を畫いたと云ふだけのことの嫌疑に止まる、其のうちには白日青天を見る時もあらうからそれまで母親は此の其角が預かッて居る、ドンな事をしたッても母親に不自由をさせる氣遣ひは無い親孝行のお前だからおッかァのことを案じてさうでもねい、島へ往ッて万々が一のことがあッちやァなるめいと思ッたから、家の片附けを先にしておッかァを引取ッてさうして今家たんだ、其の段は安心をしな」「難有うございます、私はモウ何にも心配なことはございませぬ、母一人子一人で居りますおッかさんが、私が島へ往ッた後で誰も稼いで食はせる者が無い、何かに付いて心配してさ

うでもない樣死でもしなさりやアしないかと思ッてそればッかり氣になッて居りました、兄さんが家を鎖ッて猶は茅場町の家の方へおッかさんを引取ッて下すッたのを聽いてたッ是れで安心いたしました、土地の陽氣が變ッて居る島のことでございますから活きて目に掛ることは出來ますまい、これが此の世の訣別かと思ひます」　其「詰らないことを言ッちやアいかぬ、まだ五十、六十と云ふ年ぢやアない、壯んな齡だ、其のうちにまた喜びがわッて救になッて歸ることもあらうから、其樣なにその氣を落さないが宜い、就いては是れは紀文の旦那から屆けて呉れと言ッて下すッた金だ、二十五兩ある、此の十五兩は新造が遣ッて呉れと云ふので頂いて來た」　一「へエ……」　其「地獄の沙汰も金次第、何處へ往ッても錢金は役に立つもの、此處に十五兩ある、是れはホンの私の志だ、ドウぞ持ッて往ッて呉れ」

一「兄さんドウも世話にあとます上に、此樣なに大金を貰ひヤしては何とも濟みませぬ」　其「マアマア持ッて往きな、後はドウでもする、私は何も十二兩や十五兩や二十兩の金はドウもたッて出來る此方のことは持はないが宜い、モッと早く手が廻ると貴樣の懇意からチッとやッとの金も集まらうが、何分にも昨夜の今日だからドウすることも出來ない」　一「ドウも色々御心附け下さいまして有う存じます、ドウぞ兄樣、身躰を大事にしてお呉んなさい」　其「お前もドウぞ陽氣の違ッて居る所へ往くんだから、朝夕ともに嘸や辛らからうがドウも仕方がない、それまでのことと思ッて赦を待ちなさいヨ」　一「兄さん、さう言ッてお呉んなさい、私は胸が一杯になりました、ドウぞ歸りになッたらおッかさんに宜しくヤて下さい、私が身躰の惡いところを召捕りになッたから心配して死んでしも仕舞や

アしないかと思って居ませうドウか會って來たが一螺は大分丈夫だからとドウ子仰ッしやって下さい」其「ン、そりやアお前が言はねいでも家へ歸って母親に其の通り言ふ、アヽ浮世だなア、昨日までアヽやって繁昌して居た英一螺が俄仕着を着て遠い島へ往くと言ふのは情けない」と左しもの其角も胸一ぱいになったと見ゐて男泣にホロリと飜した熱い涙、側に見て居た一螺も思はず知らずワーッと聲を揚げて泣出した

第二十八席

途端にブーウと云ふ竹法螺の音、役人が其處へ來て「サア〳〵モウ竹法螺が鳴ったら少しも猶豫は出來ぬから、皆な船へ這入った、船へ這入った」其のうちに遠島船は碇を揚げて走り始める、紙船に乘込んだ其角を始めとして四五艘の船に居りました者は、唯遠島船の走ぶするのを見てワーワーと泣出す聲、實に目も當てられず聞いて居るさへ胸を打ちまするくらゐ、船の影が見ゐなくなるまで見て居りました、其角も漸々のことで岸へ船が歸ぶまするとすぐに茅場町の家へ歸って來た。弟子達が其處へ出て「宗匠淋歸りなさい」其「何はドウした、一螺のおッかさんは？」弟子「何だかモウ座敷に泣いて居ります」其「ア、さうだらう……おッかさん、今歸って來た」母「ドウも宗匠色々難有存じます、悴はドウでございます、ア、云ふ身躰の弱い奴でございますから、それッきりにでもなぶは致しませぬか」其「ナニ、往って見たところが壯健だ、奇なもんだチー、是れから遠い所へ往くんだと云って氣を張って居るせいか、平常よぶ顏の色艶も善い、お前のことを甚く案じたから斯う〳〵で己れの家へ引取ッたと話をしたら、大層喜んでニコリ笑って別れたロ、就いて役

人に段々聽いて見ると他の者は赦もあるまいが一蝶に限ッては嫌疑に止るものだから、少し公儀に沒喜びがあれば直に赦になると云ふから、マアおッかアや氣を長く待ちなさいヨ」一母「色々難有う存じます、沒心配を掛けまして濟みませぬネー モウナンでございます、此の世では怖に會へますまい」其「左樣な詰らぬことを言ッちゃアいかないそれに別れるとき一蝶がさう言ッた、彼島へ往くと罪人の役と言ふものは鯨の干物を裂くのが役ださうだ、デ私の手に取りまする干物へは鯨の間か目玉へ松葉なり笹の葉なり挿込んで置きますから廻り廻ッてくさやの干物が江戸へ參ッた其のときは赤い松葉か笹の葉が鯨の間に狹まッて居たら、まだ一蝶は壯健で居ると思ッて下さい、ドウぞさう云ふ干物があッたらおッかさんに見せて安心をさして下さいと斯う言ッたから已れが是れから新堀、四日市を捜して直ぐに其樣なことも無いが、干物の來る時分に一つ尋ねやうと思ふ」一母「さうでございますか、それでもマア其樣なことを一蝶が言ッて呉れましたか、ドウかマア宗匠、宜しく頼ひます」其「アヽ必ずおッかアや心配しなさんな、親船とも行くまいが、猪牙船に乘ッたやうな了簡で暫らくマア家に居て遊びなさいヨ」一母「ハイ、難有うございます」と言ッて一蝶の母はそれから云ふものは唯佛事のみ一生懸命に致しドウか島へ往ッた一蝶に間違ひが無いやうにと思ッて拜んで居りまする。其のうちに二月經ち、三月經ち、早や半年餘りになりますから、モウ大抵島の干物が來る時分と思ひまして寶井其角が是れから新堀四日市へ往ッて干物を尋ねると云ふ滑稽の沒話になります

第二十九席

前席にも陳べました通り寶井其角は同じ芭蕉先生の十哲の中でも發句に掛けましたら、餘はどドウも上手な人でございます、上手過ぎて芭蕉先生に叱られたことがあります、何の句でありましたか句が大層荒かったと見て芭蕉が其角を喚んで「ドウもお前は發句は、上手だが、誠にその句が荒い、それでは此の蕉風と云ふことに當らない少し慎しんでやらなければならぬ」と多くの中で言はれたことがあります、其のときに其角も恥かしいと思ッたか、師宗がそれはどに言ふなら一つ蕉風に適當と云ふ句を詠みたいと思ッて考へたときに丁度その芭蕉先生が京都に會があッて其の點をしに、京都まで傳上りになります、それを聽たから其角は通し駕でございまして中山道を急いで師匠樣に遇はないやうに京都へ上りました、京都にも社中があります、其の社中の所へ往ッて其「さて今度折う〳〵云ふ

で私は師匠に叱られた、凌辱められたから、ドウど回復したいと思ふ、今度の催に付いて師匠の來る前に本句を詠まして貰ひたい」と言ッた、其のときはモウ卷が出來て居りましたから、○「折角ドウも茅場町の宗匠が來なすッても、モウ此の通り出來上ッて居るから、句を入れるところは無い」其「百里からの道を折角來たものだから、一句でも入れさせて貰ひたい」と言ふ。ところで七千三百句もあります中へ、其角がたッた一句入れましたけれども清書は一人でするので、トンと其角が書いたと云ふことは知れないやうにして當人は祢に隱れて居る、其のうちに日を重ねて芭蕉桃青先生京都へ着いたしまして、三條の小橋の亀屋と云ふのへ泊りました、サア宗匠が來たと言ふので大勢出迎ひに參り、圓山の金月樓と云ふ所で開會を致しまするに付いて七平句からあるのですからナカ〳〵一日や二日掛ッて見

切れるものでは無い、當今の宗匠は五千三千の發句の點をするのには二時間もあると致しますが、昔は一句〳〵考へて點式を取りましたものですから七千句もありますと五日や十日通さて掛ッて見たものです、それを芭蕉が頻りに繰返し繰返し見て居たが、一日社中の人を喚んで「其角が來て居るナ」と言はれた、固より内證のことでございますから「イヱ、其角宗匠は來て居ませぬ」芭「イヤ、居ないことは無い、何でも其角が居る私が小言を言ッたことがある、大方それを回復しやうと思ふところから當地へ來たものと見る、屹度來て居る」○「へー」芭「此の句は失禮ながらお前方が大勢集ッても迚も出來ない、其角の外に此の句を詠む者は無い、同じ十哲でも嵐雪や杉風にも此の句は詠めない、ドウも其角と言ふ者は發句を詠ましては實に名人だ、ドウぞ喚んで下さい、私は一旦小言を言ッたが、此方よと一

つ謝さうから」と斯う言はれるものですから仕方なく其角に話をすると、其角も「さう師匠が言ふならば目に掛る」と言ふので芭蕉の側へ參りまして、其「誠にドウも宗匠相濟みませぬ、エー先きに參りまして、ドウかその卷中に加はりたいと存じましたところ卷は上りましたと云ふところから一句入れさせて貰ひまいたがそれが目に附ましたか」芭「ン、天地を打つ槌は外れるといへども是れは外れまいと思ふ、此の次の句は其角、お前だらう」と言ッて出しました。其のときに十二三人列んで居た者が感心した發句を詠んだ其角もエライが七千三百もある中で是れは其角が詠んだらうと指名いたしました芭蕉先生も實に名譽の者でございます、其ときの發句が

六波羅や山につばきの落ちる音

と云ふ句でございます、實に此の平家一門の滅びたのを言はず

語らず十七文字に含めて山につばきの落ちる音と云ッたのは蕉風の体を潰しませぬ名吟でございます、デ此の句を詠んだに付いて一旦叱ッた方で謝ると云ふくらゐなことで、サア其の點から考へて見ると發句を詠ましたら芭蕉先生も一歩讓ると云ふくらゐ

第三十席

殊に此の其角と云ふ人は義俠心があとました、左れば一蝶が島へ往ッてから後は自分の母のやうに一蝶の母親を大事にして「今に一蝶も歸る、今には赦になるから」と言ッて當人を喜ばして居た、其のうちにもウ大底島で拵へる干物が來る時分だと思ひますから、一日供を連れないで新場の河岸へ參ります、新場四日市は魚物が澤山でございます、する河岸で相摸屋と云ふ鰹節の家へ

來て　其「エ、、旦那在宅かい」　主人「イヤ、コレは茅場町の宗匠は珍らしい、何です？」　其「エ、島の干物が來て居ますか、くさやが？」　主人「エー來ましたとも、新荷が着いて居ります」　其「新荷が？　そりやア有難い、チョイと拜見しませう」　主人「態々それしきのことに宗匠が來なくても宜い、使ひの者か何か」　其「イヤ、ドッかり目に掛りたい」　主人「ヒの目に掛りたい？　何には目に掛ります？」　其「干物に？」　主人「戯談言ッちやアいけませぬ、干物には目に掛る奴があるものですか相變らず戯談」　其「戯談ではない、エーそれを此方へ」デ若い者が其處に積重ッて居る籠を五十籠ばかり其角の前へ持ッて來た、其角は嬉しさうにそれを見て居たが、何に分一目したんぢやア鰓の間や目の玉に這入ッて居る松葉や笹の葉が見えないから、裏表を見ていきなり干物の頭を捩いで仕舞ッた、それから見ちやア頭を捩ぎ手に取ッちやア頭

を振き瞬く間に二百枚ばかりの干物の頭を皆な振いだ、主人「宗匠〳〵、戯談やッちやアいけませぬ家で食物にするなら宜いが贈物にするにやア頭を取ッちやア」其「頭を振がないと見出し悪い」主人「何が見悪い？」其「マアドウぞ任せなすッて下さい」とトウ〳〵座り込んで五十箇ある干物の頭を皆んな振いで其「エー左様なら」主人「アラ、氣が遠ッたせ、ドウだいドウもコラ皆な干物の頭を振いで仕舞ッた」「旦那彼りやア何で？」主人「茅場町の宗匠だ」若者「へー、干物の罰が當ッたんだナ」主人「さうヨナア」若者「一枚も寶物になりやアしない、皆な頭を振いで仕舞ッて」翌日四日市へ往ッてまたその傳で干物屋へ寄ッて一々手に取ッては一枚づゝ見て頭を振ぐから、サア終ひには評判になッて、其角が河岸へ來と「來た〳〵」其角が來た、干物を片附けろ、干物を片附けろ」と言はれるくらゐ、毎日〳〵宗匠が見

たがきてドウも無い。さう斯うする間にモウ十一月の下旬寒い風の吹く時分、茅場町の宅でございまして座燈に這入ッて頻りに發句の點をして居ると、窓下へ「エー魚商でございます、何か宜しうございますか？」窓から顔を出した宗匠が「何があるんだェ」魚商「エヽモー此の風ですから、カラッ不漁です、島の善い干物がございます」其「島の、くさやか」魚商「ヘー」其「フヽーム、此方へ這入んな」と言ッたが、腹の中で己れの家へくさやの干物を持込んで來るのは此の野郎餘ッぽど素人だと思ッた、魚商「有難うございます」と魚商は直に家へ這入ッて來て臺所に待ッて居ると宗匠出て來て「餘ッぽどあるか」魚商「エー一籠ございます、ドウぞマルで買ひなすッちやア」其「ン、氣に入りやア、皆んな買ふ」魚商「エー願ひます」其「ン、毎日くさやの干物を見るけれども皆な同じ空だか見當らぬ」と前へ干

物籠を引寄せてドッタリ胡座を組いた其角宗匠、また一枚づゝ頭を振ぎ始めた、魚商は驚いた「旦那、頭を振いぢやアいけませぬ、皆な買ッてお呉んなさりやア宜いが、さうでもないと何處へも賣ることが出來ませぬ」其「默ッて居ろ氣に入りやア皆な賣ふが氣に入らなけりやア一枚も買はぬ」魚商「一枚も買はぬなら頭を振いぢやア仕方がない」其「マア宜いや、默ッて居なさい」と言ひながら頻りに頭を振ッて「アゝ無いなア、アゝ云ふ身躰の弱い奴だから事に依ッたら島へ往ッて時候が違ッて居やうから死んでも仕舞ッたか知ら？　アゝ可愛さうに！　ドウかモウ一度江戸へ歸ッて來て一蝶と云ふ名前を揚げさせて遣りていものだ、二つには母親の安心した顔を見ていものだ」と思ッて頻りに調べて居ると、五十枚ばかり見るうちに鯉の間に赤くなッて居る松葉が挾まッた干物が一枚出だ

第三十一席

イヤ、其角は喜んだの何のッて　其「居た〳〵、ドウした一蝶、マアドウもお前のことを案じてドンなに己れは心配したか、毎日、新堺、四日市の河岸へ往ッて改めたが知れやアしない、今日は何て言ふ吉い日だ、善く來て呉れた」魚商は驚いた「これは氣違だ、善く來て呉れたと云ふ奴があるものか」其「ドウした一蝶、島へ往ッて大層苦勞したと見ねて痩せたナ」干物だものドウして太ッちやア居ない、其「マルで顔違ひがしたア、定めて心配したらう」「こりやア大變な所へ搾ぎ込んだ」魚商は驚いて居る、其「マアア宜い」干物を顔へ當てゝ見たり、また戴いて見たりして居たが其「ハゝア大變顔違ひがしたゼ、ドウも、一蝶、……母親や」一母「ハイ」其「チョイと來おさい」一母「何でございます宗匠？」一母

何でちやアない、一蝶が來た、伜が歸ッて來た」一母「伜が歸りま
した？」其「サア〜見な、瑛て話をして置いた鯉の間か目の玉
へ松葉なり笹の葉なと入れて置くと言ッたが、此の干物は此の
通り赤くなッて居る松葉が鯉の間に挿してある、是れは一蝶が
拵へたに相違ない、ア、誠に久し振りで會ッた」一母「さうでご
ざいます、私も久しく伜のことを思ッて居ります、久々で伜に對
面が出來ました」とお婆さんは干物を取ッて掌中へ抱き上げた
樣子、魚商は愈よ驚いた「こりやア大變だ！婆さんも氣違ひだ
！」其のうちに其角は奥へ這入りました、英一蝶は至ッて茶の好
きな人で、幸に湯も沸騰ッて居るから茶を一服點ッて例の干物
を三寶の上へ載せ其の前へ今點てました淸茶を置いて其「サ
ア一蝶、お前は好きだ、マア一服飲みな」魚商は愈よ驚いた、何故の
國に干物が茶を飲むものか、是れは氣違ひだ、大氣違ひだ、本氣違

だ。母親は側に居て「マアドウも宗匠難有うございます、伜は淸
茶が好きで」其「ア、好きだと思ふから今一服點ッた」と茶腕の
上へ干物を載せたヲ、魚商は目ばかりパチ〜して見て居る、其
のとき其角有合せました短冊へサラ〜と書いたのが

島むろに茶を申す塞さかな

其の短冊を側へ置いて其「魚商さん、嘘を驚いたらうが、是れに
は色々譯があるとだから、干物の代は幾らだエ」魚商「エ、何で
ございます二貫で宜しければ」其「二貫が三貫でも宜い、マア、少
し遊んで往きなさい」と魚商に少し金などを遣ッたから魚商は
喜んで歸る。其の後は其の鯉の間に赤い松葉の這入ッて居る干
物を我が子のやうに頼りと母親は大事がッて居るところが翌
年になりまして夏の初めに島役人に手紙の音信をすることを
許されまして其角の所へ長こと書いた禮狀、其手紙の末に書い

てあッたのが

初鰹魚芹子は無うて涙かな

是れに付いて色々論があります、ドウも芹子と云ふのは解しいと思ひますが、昔その初鰹魚だからと言ッて山葵なぞと云ふものを用ゐない時分は芹子で鰹魚の刺身を食べたものと見ねます、それゆゑ手紙の末に「初鰹魚芹子が無うて涙かな」と一蝶が書いて寄越した、其角は其の手紙を見て涙を流し、是れも許しを受けまして返書を寄せるときに母親も壯健で居るから安心をして居ろと云ふことを書いて其の手紙の末に

その芹子きいて涙の鰹魚かな

と云ふ返しの句を認めて送りました、其の手紙が島へ届いたときに一蝶は、此上なく其角と云ふ人は義俠心だと言ッて喜んで居りました。さう斯うするうちに將軍家に祝慶があり

ものと見ねては赦と云ふことになりまして江戸表へ歸ることになッたときは、ドウも大層に迎ひの人が出ました、其角が先立ちでございまして、島から歸ッて參りました一蝶を、直ぐに自分の家へ案内する、母親は炒豆に花が咲いたやうな心持がした、「生前伜に對面が出來るか」と言ッて大層な喜び、實は此の島より歸ッてから一蝶と名前を附けましたのでございます。さて島から歸りましてより一層一蝶は名前を揚げました、其角の義心で一蝶の母と云ふものは幸ひ長壽を保ち八十二歳に致して病死を遂げました、併し英一蝶と其角の間と云ふものは實に別段でございました。是れは一蝶の畫きました乘合船の小柄に續いてのぼん物語でございます

名人三幅對 終

探幽の屏風

桃川燕林口演
速記社々員速記

第一回

エー今日より畫工狩野藤五郎守信の傳を講演いたします、此の人は後に探幽齋と云ッて一代にして禁裏の御畫所を預りましたるくらゐの人でございます、それで此の守信と云ふ人の生涯には隨分不思議なことがあッて、當今でも比叡山の延暦寺に遺ッて居ります足無しの盤の唐紙、是れはその守信が極若い時分に行脚して參ッて畫きましたもの比叡山邊には始終斯う云ふ俳諧師、畫の先生方が五人や三人泊ッて居ないことはございませぬ守信は畫師だと言ッて參りまして、彼れ是れ七八日居るのに何にも畫かない、叡山の出家達は彼は事に寄ッたら畫師ぢやアないだらう、畫工なら何か畫いて見せるものだが道具も何も持ッて居ないし、何か名を附けて食倒しに來た奴ではないか、一つ試して見やうと思ッて　僧「オヽ先生、お前さんマア暫らく居なさる分には宜いが、畫工なら畫工で扇子一本でも唐紙半折でも宜いから畫いて見せて下すッてはドーで」　守「イヤ、拙尤もです、エー筆が無いものですから、それでッイ畫きませぬ」　僧「ハア、所持なさらぬか？」　守「持ッては居りませぬ、ドウも普通の筆では面白く畫けませぬ妙な筆を探したいと斯う思ッて居ります、併し畫を畫かないから畫工ではないと云ふ思召もございませうに依ッて、今日は是非筆を探して畫きますドウか皆さん墨を磨ッて置いて下さい」　僧「筆を探して買ッて入らッしやる？」　守「イヱ、買ッては參りませぬ、拾ッて」と云ふから妙な人が

あるものだと思ッて居る。朝飯を食べるとブラリと出て往ッて、當今で云ふと十時の頃に歸ッて來ました、見ると何所で拾ッて來たか馬の草鞋を一足、勿論穿いた物と見えて餘ほど穢いやつを洗ッてそれを提げてからに這入ッて來たから、廐山の坊さんは驚いた　僧「先生何で？」　守「エ、此の馬の沓で畵きます」　僧「是れは不思議だ、ドッも馬の沓で畵を畵くなんて、一つ拝見しませう」　守「墨は出來て居りますか」　僧「墨はモウ磨れて居ります」　守「それは難有う存じます」始めから大した絹や紙を畵かせるのも、筆力が知れませぬから、其のとき住持の居る、ました座敷に九尺四枚の唐紙があります　僧「エー先生、甚だ貼込んでから畵いて下さいと云ふのは失禮だが白くして置くのもチト見ッともあいやうだ、此の唐紙へ何でも宜い、一つ畵いて下さい」　守「ハ、左樣……エー、貼込んであッても何でも構ひませぬ」九尺四枚の唐

紙を斯う取ッて列べました、スルと守信は其の馬の草鞋の洗ッて來たやつを墨の中へ入れて少時斯う墨を切ッて居りました、十二三人其處に見て居て、馬の沓で畵を畵くとは不思議だ、ドンな物を畵くかと思ふと、唐紙の下部の所へペタリペタリ〳〵、〳〵と七八つ斯う押しました。丁度炭團屋の看板みたいな物を畵き片脇へ其唐紙を置いて　守「サア是れで宜しいから乾いたら立てなさるが宜い」　甲「何です」　乙「何だか」　僧「エー先生何です、それは？」　守「是れはろの文人畵の樣で」　僧「戯談言ッちやアー困る、眞ッ黑の丸い樣はあるまい、樣なら是れへ爪を畵くとか……」　守「爪を畵くと這出します」　僧「馬鹿を言ッちやアいかぬ、這出して堪るものでは無い、這出すくらゐなら當山の寶物にする、ドウぞマア一つ是れへ爪を畵いて下さい」　守「這出して宜しいと云なら畵きませう」と又筆を執ッてそれへサラ〳〵と畵い

た、殘らずは書きませぬ、八つ押してある所へ三つ爪の形を書いて後は其の儘、守「皆な遣出して仕舞ッては詰らぬ」僧「ハヽ」敵山の出家達は「是れは氣違ひだ、飛んだヤア唐紙を無駄にして仕舞ッた」「妙なものを書いた」と笑ッて其の晩は先づ立ッて置きました

第二回

翌朝になッて見ると、其の爪の形を書いた書だけマルで淵黑で書いたやうに、スッカリ墨が拔けて仕舞ッて爾餘の五つの方は墨黑々として居ります此のとき各僧驚いた「此の人はドウも非凡の人だ何か法があッて書いたのか知ら」と云ふので尋ねたところが、何も別段に法は無い、守信の一心がそれに届きまして、足を書いたゝけ其の墨が拔けましたので、是れは當今でも燒け

も致さぬッックリして大切に保存せられ寶物となり鄭重にされて居ります比叡山延暦寺の奥へ通ります と能く案内者が「守信先生が修業中に書いた足無しの蟹の唐紙は是れでございい」などと申しますが即ち是れなどは一つの不思議さうかと思ふモウ探幽となッてからでございますが、薩州家から金屏風を頼まれました、デ其の潤筆料が其の時分の百両、何ぼ一双の屏風だからと言ッて百両と言ッたら今日の千圓に向ふくらゐ金は先きに取ッて使ひましてからに屏風は書ない二月や三月は宜いがマルで一年二年三年と經ッても書かないから、薩州の大守悉く怒立腹あそばし家來を以て嚴談をした「當年中に書けば宜し、當年中に愈よ其の金屏風を書かない節は其の分には捨置かぬ、當方に充分の致し方がある」と云ふ嚴しい懸合を喰ッたからドウも探幽は慄いた「誠に恐入りましてございます、折角

依頼になりました物を、ツイ〳〵捨置いたではございませぬ、工夫を致して居りましたゆゑ遅くなりました、當年中とヤさき三月過ぎませぬ、迚も畫くなら今日中に畫いて納めますからドウぞ殿様へ宜しく執成を願ひたう存じます」うこで薩摩の家來河上某が驚いた、三年も畫かぬに居た屏風を一日に畫くと言ふ是れはまた不思議だと、早速立歸ッて大守へヤ上ける、島津の大守は「妙な奴だナ、今日中に出來する？　それは定めし美事なことであらう」と待ッて居で遊ばすくらゐ。探幽先生の家は騒ぎだ「サア〳〵皆な墨を拵へなければならぬ、相手が薩摩様だからマゴ〳〵すると打殺される、何が不自由だッて首の無いくらゐ不自由は無い、跳へられて居ながら畫かないのは一體俺が悪い、今日中に此の屏風を畫いて仕舞はなけりやアならぬ」弟子も驚いた、金屏風一双一日に畫くと云ふが何を畫きなさるか

知らん、とイヤドウも澤山墨を拵へた　弟子「エー先生」　探幽「ン、何だナ」　弟子「圖はその向ふでも何れ御好みが……」　探幽「無い、任せると云ふ仰せだ、一番是れが宜い、ドウ云ふ物を畫いて呉れと言ふと、ドウも此方で巧く畫かうと固くなッていかぬが、任せるとなると此方の氣が進んだのを畫くから……」　弟子「エーそれでは山水で？」　探幽「さうさナア何が出來るか自分にも分らない弟子達は「畫き人に分らないと云ふから妙だせ、是れは……」と言ッて居る

第三回

一双の屏風を座敷へズッと廣げて仕舞ッて、御案内の通り一双と言へば二つであります、それを斯う廣げて見て居たが、筆を持ッて來て丁度屏風の七分三分と云ふ所へ、何だか斯う山の形を

一つ畫いて、下からまた斯う肇を合せたものですから、トンと三日月のやうな形の少し大きい物が出來た。弟子達は眼を皿のやうにして見て居る。「是れは何だしら、山にしては妙だが何でも斯う先生のこッたから名のある物を畫かなすッたに相違ない」と思ッて居ると　探幽「サア是れから皆なで手傳へ」　弟子「ドウするんで？」　探幽「大勢でナ、此の眞ン中の所だけ殘して餘は斯うソックリ塗ッて仕舞へ」　弟子「塗りますか」　探幽「大勢で塗れ」それからそれだけボカシを使ッて七八人の弟子が塗る、幾ら一双の金屏風でも大勢で塗るんだから雜作は無い、忽ち眞ッ黑にして仕舞ッて、何か少し斯う穴の明いて居るやうな所がある。其の屏風が乾くと直ぐに薩州へ納めた、太守はドウも感喜びに堪へなかッた。「探幽が一日に畫いた屏風と云ふは何よりである、早速に開け」と云ふので、是れを殿座敷へズーッと立ッて

家來方も拜見すれば殿様も感賞になると眞ッ黑い　太守「ハテナ、是れは何だや」　家來「左様……是れは何でございませうかナ」　太守「予にも黑く見える」　金「ドウも探幽の畫くくらゐでございますから名の有る物で……」　太守「ン、故實ある物で無ければ彼は畫かぬがナ、能う考へて見ろ」　金「左様……考へて居ります」一人其處へ出まして「太守へ申上げます、分りました」　太守「分ッたか」　○「是れは市中にございます黑塀で」　太守「黑塀？」　○「黑塀とヤすは家の境界に立てまする黑い塀で」、太守「ドウも金屏風へ黑塀なぞは餘り感心せぬ、少し向ふに拔けて居る穴の形がある、アレは？」　○「節穴で」　太守「詰らぬ物を畫いたナ、是れは探幽を喚べ」それから直に召されたから、彼座敷へ參りて前へ通ると、屏風が向ふに立ッて居て、殿様は餘はど彼不滿足の体　太

守「此處へ進め」探幽「汐目通り仰付けられ、難有き仕合せに存じ奉ります」太守「イヤ、其の方認めた屏風の畫が分らぬ、何ぢや？是れは黒塀かナ」探幽「屏風へ黒塀を畫きますやうな愚拙では ございませぬ」太守「何ぢやナ是は？」探幽「エー是れは目出たい魚を畫きました」太守「目出たい魚とは？」探幽「エー紀州の熊野浦で捕れました八十五尋ございます鯨でアノ少し穴の明いて居りますのが片方の眼で」イヤドウも薩州様は怒ッた「三年掛ッて潤筆料の百両も取りながら鯨の片側を畫かれて堪るものか早々取捨てい」と仰せられたから其の屏風を片付けやうとすると、其の立ッてありました屏風の下へ悉く潮が滴ッた、是れは汐驚き遊ばし、却ッてその探幽の非凡なることを汐褒め遊ばし、是れまた薩州家の汐寶物に殘り居りまして、探幽の潮の屏風と云ふのは即ち此のことでございます、さう云ふやうな不思議のありましたる御人です

第四回

此の人がまだ修業中で守信と云ッて居た時分に嵐山の櫻を見やうと云ふことを先年云ひ出しました花見と云ふと私共は花の開いて居る所へ行ッて見れば花見と思ひますが畫工などはさうでございませぬ、モウ大和の吉野に致せ、嵐山の櫻花に致せ花の盛りを見るばかりではトンとろの畫は畫けない、先年往ッて其の近傍に家を構へ、さうして山の景色、其の他をチャンと見て、また花の綻びたところを見てさうして畫かなければ、トンと眞畫と云ふものは畫けるものではない。守信は幾分か都合が、好かッたと見へ二人の弟子を連れ、両掛を擔がせ、畫の道具を充分に持たせまして東海道を上りました、然るところが懶惰の人で

でございまして酒が好きです、殊に氣に入ると一ト所に三日も五日も逗留して藝妓を喚んだり何か云て騒ぎますから、幾ら有ッても堪まりませぬ、モウそのうちに旅金も段々無くなって仕舞ひますと揮はない人と見ねて着換の衣類などを賣り始めた自分の衣類を賣るだけなら宜いがソロ〳〵二人の弟子の方へも手が附いて來たから驚いた、弟子「此の盛梅ぢやア今に素ッ裸にされて仕舞ふ」モウ名古屋へ參りましたときには大概裸體になッて仕舞ッたゆゑ弟子達は呆れて逃げて往ッて仕舞ッた、デ両掛は賣ッて仕舞ひましたけれども道具だけは有るに殘してある、其の繪の道具だけ自分で背負ッて、丁度秋の末でございましたが單衣一枚に小倉の帶を締め、脚袴も着けず草鞋を穿いて圓頭ではあるけれども、久しく月代をしないから宛然で頭は栗の刺のやうになって居る、モウ懐中に殘りましたものは一分とは無い、鰹に足りない旅金を大事にして通り掛ッたのが親宿(京都から往くと大津を親宿とヤします)此の大津宿へ掛ッたのはまだ七つ少々前とヤしますから現今の三時半頃でもございませうか、軒を列べて居る旅亭の内大津屋與左衛門と書いた行燈がございます、宿引女が二人ばかり「御泊りではございませぬか、御泊りならば宿泊を願ひたう存じます」「御泊りではございませぬか」と喚んで居る樣子ゆゑ、守信が考へた、是れから京都へは三里だから往ッて往けないことはないが、其樣に骨を折ッて歩かないでも今夜は此家へ泊ッて明日京都へ這入ッても差支ないと思ッたから、其の大津屋と云ふ家へ　守「ハイ、御免ヨ」と這入ッた、

幾場の内に居たのが主人でございませうか、眼を丸くして其處へ出て參る　與「お竹や」　竹「ハイ」　與「何で彼の乞食坊主を喚んだ」　竹「イエ、彼の方を喚んだのではありませぬ、お商人衆が二人彼方へ」　與「商人衆が二人向ふへ往ッた？　飛んでもない者を喚込んで仕舞ッた、ヘイ入來なさい」　亭主が女中と何かコソ〳〵話をするのを入口に立ッて聽いて居た守信が、ハヽア已れの姿が惡いから何か女中に小言を言ッたな、と氣が附いて　守「ざいますが、手前共では安泊りはしませぬ、モウ少々往でになりますと、幾らも安宿がございますから、ドウか其の方へ出でを願ひたう存じます」　守「ハー」　守信腹の中でムッとした情けない安泊りはしないと言ふ　與「アヽ何かい、亭主、強ッて不都合ならば往ッても宜いが宅は何かナ、宿賃が餘ほど高いか」　與「へ

ー、話をすしても迚もいけませぬ手前共は上旅宿が二朱五分、並が一朱でございます、あなた方の宿を致す宿屋ではございませぬから」　守「ぢやアナニか、一ト晩泊まで一朱？」　與「ハ世食は別でございますヨ」　話をして居るうちに懷中から錢を出して守「前錢なら差支なからうから、今夜一ト晩此家へ泊ッて往きたいものだ、私が斯う單物一枚着て穢い姿をして居るのは理由がある、道中はドウも駕籠昇、馬士がうるさい、ろれで斯う云ふ姿をして居ると駕籠も勸めず、馬も勸めないで氣安く道中が出來るから態と斯う云ふ姿をして居る、後から供も來る、着換も來るから姿が惡いと言ッて亭主さう見くびッたものでは無い」　與「恐入ッました、是れはドウも」　守信は癪に障ッたが元と江戸ッ子で、無け無しの金を二朱出して茶代だ」　亭主は驚いた、其の時分の二朱と言ッたら當今の二圓に

も向ひます　與「ヱ、是れは恐入りました、甚だ失禮」成るほど道中の御籠舁馬士がうるさいところから、此の九月の末になって單衣一枚でブルブル慄へて居るのか　與「誠に冷寒うございませうナ」　守「大きにお世話だ、宜いかい」　與「エー宜いところぢやァございませぬ」守信が草鞋を脱ぐと女中が二番と云ふ釘へ掛ける　與「斯うと何が宜いだらう土藏の前の六畳が、彼處が一番座敷だから彼處へ御案内しな」　女中「旦那樣此方へ御案内」足を洗ふ、其のうちに女中の案内

第六回

地獄の沙汰も金次第、二朱の金でも大層働いたと腹の中で笑ひながら、守信が座敷へ通って見るとナカ〳〵善い座敷で、向ふが上段の室、雑作も大分念が入って居る樣子、ア、當家は奇麗だ、まだ新らしい燒けでもしたかなと思って居る、其のうちに亭主が高坏に菓子などを載せて自身で禮に參りました　與「ドウも御疲れさまでございませう、先刻はまた御茶代を澤山難有う存じます、其の砌は大きに失禮、ドウぞ御勘辨を」　守「ナニ、亭主別に謝まることはない、斯う云ふ身裝をして居る者は斷んなさるが當り前」　與「ドウも恐入りました」　守「風呂はドウだい」　與「唯今ア上げます、まだ少し微温うございます、宜しいときにア上げるやうに致します」　守「ア、さうか、火分御當家は立派だ新らしいやうだナ」　與「左樣でございます、昨年燒けましてございます、ドウも一軒置いて隣家から火が出ましたので、何を出すことも出來ませぬ、總で全燒、やう〳〵普請を致してまだ雑作が屆きませぬ」　守「さうでない」　與「火事は嫌やですナ」　守「ドウも火事は怖いものだ」　與「モウ火事のことを考へますと道具諸式は一切要りませ

ぬやうに存じましたが、さて此の商賣いたして居りますと不自由勝でございます」　守「ハ亭主、ナニか向ふは上段の室で」　與「左様でございます」　守「拜見しやう」　與「ヘードウぞ御覽下さい、ハ案内いたします」と云ふので床の間の三幅對、自分も商賣ですから外の物は何でもないが、書いたものは幾分か參考の爲めにスッかり見たが、是れは別段惡くもなし、と言ッて褒める所も無い、ホンのモウ宿屋の懸物です、片脇の所に堅六尺ばかりあります品に塵除が懸ッて居ります　守「ハ亭主、何だい是れは？」　與「エー、屏風でございます」　守「ハア、大層御立派な屏風らしいナ」　與「エッ、金屏風でございます、漸う四五日前に出來上ッて參りました」　守「金屏風か？」　與「左様でございます、斯う云ふ商賣を致して居りますと、隨分その御大身方の御泊りがございまして其のときに金屏風一双でございませぬと、誠に恥を被くやうなことがあります、ハア迚も借金して拵へ所と斯う存じまして、其の方の商賣で懇意な者があるものですから飛へました、ところがモウ三月掛ッて漸う出來上りました」　守「拜見したいものだ」　與「ドウぞ一つ御覽下さい」是れはモウ亭主が自慢です、其處へ廣げて見せると、ナカ〳〵善い屏風だ　守「ハア、是れは御亭主餘ッぽど掛りましたナ、金屏風も是れくらゐの物を拵へて置けば」　與「左様です、此様なに金を掛ける氣では無かッたのですが、ツイ〳〵ハア人様に御見せする物だから、成るたけ立派にと斯う存じまして、酷い目に遇ひました」　守「併し是れはナニか、無地で御用ゐなさる？」　與「ヘー、物を知ッた其の道の人に聞きますに、無地金の屏風を立ッて置くには總てゐれに準じた物が無ければ却ッて笑はれるさうでございます、是非ハア是れに畫を畫いて貰ひます積りで」　守「ぢやア是れへ畫をお畫きなさる？　ウーン」

と汪鳴って居る

第七回

まだ守信も其の時分には金屏風と云ふものを畵いたことは無いから、サア其の屏風を見ると畵きたくなった　守「ぼ亭主、私は畵工だがナ」　與「左様で居らッしやいますか」　守「此の屏風を私が一つ畵いて上げやう」　與「へ？」　守「泊って居て私が一つ畵いて上げやう」　與「左様でございますか、ドウも難有うございますが」と言ひながら守信の頭から單物の様子、猫の百ひろみたいな小倉帶、それをヂロヂロ見上げて居る、守信は腹の中で嫌やな奴だなァ此奴は　與「エー思召は難有うございますが實はモウ頼みました」　守「畵工に頼んだのか？」　與「左様でございます、この石山寺に居らッしやいます狩野家の先生でございますが」　守「

フ、ム」　與「芳山と云ふ方がございまして、其の方に屏風の出來ないうちから、ドウか出來たら一つ畵いて下さいぼ願ひヤすと斯う言ッて置きまして、今日その芳山先生が來る筈ですが、何か石山寺の方に手の引けないことがあると見えてまだ參りませぬが明日は必ず來ます、芳山先生に依頼したものですからそれでぼ斷りをヤ上げまする」　守「オイ〳〵そのなァ芳山なんて下らぬ畵工とは違ふ、私は天下の名人だ、日本で幾人と云ふ者だ」　與「左様でございますか、ぼ寒うございませうが」　守「馬鹿なことを言ふな、何が寒い」　與「エ、モウ九月の末に單物で大層汚れましたナ」　守「大きに沙世話だ、其の坊さんを斷ッて仕舞へ、己が畵いて遣る」　與「ドウもさう云ふ譯にはなりませぬ、エー其の内に貴客にまたぼ願みヤします」　守「イヤ、いかぬ畵かうと云ふ念を出したから、斷然私が畵く」　與「左様な無理なことを仰ッしや

ってはいけませぬ、ドウか其のうちに」　守「其のうちに？　ア、分ッた、拙者のやうな名人に細ひと潤筆料を多く取られる、斯う云ふ考へだらう、私の方から書きたいと云ふのだから代は要らない、無料で書いて上げる、お前の方で絵の具を買ッて、其れて、さうして當家へ泊めて置いて呉れゝば私もそれで謝儀なしで書きませう」さうなると段々斯う品物が悪くなッて來て、亭主與左衛門はまた守信の頭から單物を頭りに見て居る　守「能く人の顔を見るナ、此の男は」　與「ドウもナンで、難有うございますが、さう云ふ譯ですから断りを」　守「ドウ云ふ譯だ、貴公は己が無料で書いて遣ると云ふのに」　與「其様に貴客が書きたいと仰ッしやるなら、ドウでせう臺所の澁團扇を書く書工とは違ふ、お前人を馬鹿にして居るナ、さう云ふやうな書工ではない、私は名人だ」　與「左様でございますか、ヤア其の内に

頼ひます、へ、ゝ、ゝ」　守「オヤ、嫌に笑やアがる」亭主も面倒ですから、ソロ〳〵に店へ往ッて仕舞ッた

第八回

サア後に殘ッて守信が腕を組んで考へ始めた「書きたいナ、己れが弟子を連れて両掛の一荷も擔がして、江戸を立ッたやうな裝であれば縱令當家の亭主が直に屏風を依頼しないまでも、唐紙書仙紙乃至は扇子一本でも書いて呉れと言ッて出す、私が腕を揮ッて書いて亭主の氣に入れば此の金屏風を書いて呉れと向ふから言ふ、それを此方が斯う云ふ裝をして居て、頼ひと言へば何は亭主の方で馬鹿に仕やアがる、ア、書きたいナ、此様な所に居ると毒だから宿を換へやうか知ら、それも詰らないナ、茶代を二朱遣ッて旅籠料は前金に拂ッて仕舞ッたし、是れから出て

往ッたところが仕方がない、アヽ詰らない、アヽドウも下らない
もんだ」と後世へ名前を殘す人だけあッて、ドウもその屏風を書
きたいと思ふと風呂へも這入らず、膳を持ッて來たが、物も食は
ない　守「寢床を敷いて呉んな、直に」女中「ハイ御飯を」守「誰
が食ふ奴があるか」と飯を食ふどころではない「アヽ書きたい
ナ」女中は驚いた、頭りに「かきたい、かきたい」と言ふ、妙な人が泊
ッたと思ッたが言ふが儘に寢床を敷る、守信は疲れたと見ねて
寢床へ這入ッたと思ふと一ト眠りグーッと眠て仕舞ッた。もう
彼れ是れ八つと云ふ時分になッて圓場へ往きたくなッたが眼の
が覺めて、圓場へ行ッて來て寢床の上へ座り込んで四邊を斯う
見ながら考へると、旅亭のことですから皆なモウ熟く睡て居る
樣子、再び立上ッて向ふの唐紙を明けて上段の室を見ると、此處
には客が無いと見ねて眞ッ暗です、此方の燈火が映ッて見ると

最前の屏風がソックリ立ッて居る「彼處にあらア、アヽ書きた
いナ、待てヨ彼の屏風を已ア書かう、屏風を書いてさうして逃出
さう、捕ッても命は助かるだらう、それにしても亭主が起きて居
るとさう云ふ譯には行かないから、亭主の樣子を見て來て遣ち
う」と密間投宿ッて勝手を知ッて居るものですから、見世へ出て
來て見ると、宿屋さんぐらゐ危險な商賣はございませぬ、盜賊だ
か何だか知れもしない者を泊めて締をして置くのでございい
ます、旅店の亭主が夜眠るやうなことがあッては、大きに泊る人
が危險でございます、與左衛門は宵の中に起きて居たんだらう
が、モウ夜半でございまして少し宵に飲んだ酒の爲めに酔ッて
居ると見ね、帳場の内に大鼾で眠て居る

守信はソーッと側へ寄ったが目を覺す樣子もないから、ソコヽに行燈の臺にありました蠟燭を一挺、是れに火を點けて根據の内の硯箱を見ると墨の斷片が澤山あります、樣子其の片墨を一ト掴み掴んで臺所へ出て來ました、中皿を裏返しに致し糸底の所へ蠟を垂して蠟燭を立てました、デ摺鉢を出して其の中へ少し水を入れて持ッて參り、墨を拋り込んで櫨木を出してから に音のしないやうに搔廻し始めた、迚もドウも墨を一々磨ッて居たのでは、手間が取れて其のうちに夜が明けると引ッ捕へられるから潰墨を拵へ、兎鉢がありますから、それへ墨を移して

「先づ是れで墨が出來た」と獨語を言ひながら大きな鉢に水を一杯汲んだ、是れはその筆を洗ふので筆洗が無ければ書は書けないものです、揚板を二枚外して之れを重ね、其の上へ蠟燭の立ッて居る中皿を載せて墨の鉢と水の鉢をそれへ載せ是れを持ッ

て奥へ參りました、何の爲めに其の揚板を二枚持ッて來たかと云ふと一枚の揚板の上へ水や墨を置くので、一枚の揚板の方は是非手を突いて書くものですから、穴でも明けてはなりませぬ、それが爲めに用意して來たので、金屏風を書くのは始めてだが、「是れまで屏風は度々書いたことがありますから、書く法は心得て居る、上段の室の唐紙をピタリッと締めて燈光の漏れないやうにして置いて一双の屏風を其處へ廣げた、片肌脱になッて仕舞ッて其屏風を見て居たが、イヤ取別て金光を增し實に立派な屏風、守信は筆を持ッたが考へたッ「待てヨ、何を書かう、山水か ナ、宜し〳〵山水を書いて遣らう」是れくらいの屏風でございますと、是非下繪を取ッて、それから綿密に書かなければならない、ところがドウもナカ〳〵下繪などを書いて居る間がございませぬから、ブッ附け書きだ、サア書き始めたが早いの早くないの

ッて、チョイ〳〵チョイチョイ書いて居る、岩に附いて居る苔の所なぞは筆を細かに畫くと善いものですが、ナカ〳〵さう云ふことをして居る暇にはならぬ、筆一ぱい墨を含まして置いて、パタ〳〵叩くは〳〵、それゆゑ屏風ばかりではない四邊の障子だらうが唐紙だらうが墨だらうが墨だらけ、だが平氣なもので、トウトウ畫いて仕舞ひました、出來上ッてから「ウヽム、己れが畫いて己れに分らないや、是れは亭主が見て目を眩さなければ宜いが、何にしろ出來たが、不思議だ、是れは！」デ筆を片脇へ置いて墨の這入ッて居る鉢を此方へ取らうと思ふと、兜鉢の敷が惡かッたと見ゐて、金屏風の上へザアーッと顚した「オヤ〳〵、先づカス物にして仕舞ッた、是れは弱ッたナ、カス物ぢやア氣の毒だ」と筆でどいましてスッカリ墨は取ッたやうなものゝ金でどざいますから後に殘う墨が殘ッた「何にしても墨が附いちや

ア是れは大變なことになッた」と暫時斯うその墨を見て居たが何思ひけん肌を脱いで守信は右の單物の袖を墨の中へ入れレユーと絞ッて例の汚染のある所を隱さんが爲めにスーッと一筆畫くと云ふのはあるが、一袖に山を畫きました、畫いてから斯うヾゲヾゲ見て居たが「ウヽム、是れは僥倖だ、此の山と右の方の山との間に見越しの山と言ッてドウしても無ければならない所だ、チョッと此の墨を隱さうと思ッて畫いたので見越の山が出來た」先に汚染のある所へ衣類の袖で畫いたから妙に珍らしい墨色が出ました「是れは僥倖だぞ、ドウやら是れで畫になッた」と獨語を言ッて居る

第十回

遨所の方でガラ〳〵〳〵と引窓の明いた音が致しました、

守信は周章て道具を一纏めにして肌を入れ書の道具を風呂敷に包んで背負って仕舞ひ燈火を消して上段の室をヒッタリと閉ッてからに臺所へ出て參り　守「イヤ早う」　男「ヘー、早う ございます」　守「己は昨夜頼んで置いた、何故早立だと言ふのに起さない」　男「エー、今朝は早立でございましたか」　守「アノくらゐ己が頼んで置も旅籠料は現金に拂ッた」　男「エ、それは承知いたしませぬ、見世のことは私は……」　守「見世のことは知らぬと？、まだ飯は冷飯だらうが、それでも宜い早々結んで呉れ、中へ梅干を二つばかり入れて……食ひながら逃げる」　男「エッ……」　守「ナニ此方のことだ、早くくして呉れ、茶代を呉れたと旅籠料も現金に遣ッてある」　旅籠屋には隨分其様なことがあるから一向氣にもしないで、大きな結飯を三つ拵へて中へ梅干を入れた、それを持ッて臺所口が開くとヒイヤ守信は逃げたの通げないの

と言ッて何處かへ往ッて仕舞つた。話岐れて大津屋の家では二階は二階、下座敷は下座敷、上段の室は上段の室と皆な女中が手別けをして掃除を致します、お夏と云ふ女中が今上段の室の方へ參りました、箒と采配を持ッて往ッたかと思ふとイヤ驚いて出て來まして　夏「旦那様、大變でございますョ」　與「何が大變だ」　夏「何が大變ところやアございませぬ、屏風が大變で」　與「屏風が？、ドウした、まだ本當に乾かぬから鼠でも掛ッたか」　夏「さうではございませぬ、塗ました」　與「塗ッた、そりやア大變だと、亭主は慌いて直に上段の室へ來て見たが屏風ばかりか壁でも唐紙でも墨だらけ、其の書いてある屏風を見るとウーンと少し氣が遠くなッて　與「大變……アヽ松助」　松「ヘー」　與「昨日、早く泊ッた乞食坊主があッたがドウした」　松「今朝方引窓を明ける途端に奥から來まして、早立を頼んで置いたのに何故起ら

ないッてエライ怒りました、怒ッてさうして飯を食はずにまだ沒飯を是れから炊くんだらう、さうしては居られぬから冷飯でも宜い結んで臭れ、中へ梅干を入れて臭れしば食ひながら逃げると言ました」　與「あれだ、己れが氣が付かなかッた飛んだことをしたナ、土藏へでも仕舞ッて置くと宜かッたが北樣なことも無からうと思ッてツイ己が輕忽しいもんだから、マア飛んでもない物を畵いて逃げて仕舞ッたなア、二十五兩三分二朱と二百六十八文打捨ッた、マア其處へ立ッて見ろ」と北の金屏風を立てまして、頻りに見て居たが幾ら立ッて見たッて眼力の見ねない與左衛門ですから　與「何てエ物を畵きやアがッたんだ、マアドウも佛掌薯みたいな物を澤山畵いちまッた、モウドウも旅籠屋はやめだ、是れぢやア叶はぬ」サア氣の毒に思ッて家内の者が北處へ參り、主人の氣を慰めたが、屏風の前へ座を込んだッきり青い息を吹いて居る其のうちに旅籠屋仲間が之れを聞いて是れは打遣ッて置けないから早速仲間の月番が參ッて「さてマア大津屋さん飛んだことで、承はッて驚きました、屏風が沒災難、誠に氣の毒、エー葬式は何時……」　與「馬鹿にして居る、何處の國に屏風の葬式をする奴があるものですか」悄々として與左衛門は見世へ出て來て帳場の内に飯も食はないで迂鳴ッて居る

第十一回

とでろへ弟子を連れ、両掛なぞを擔がせて參りましたのが彼の芳山先生、是れは俗に言ふ旅廻り、少し見識を取る痴人おどかしと云ふ方の質、入口から世辭を言ひながら　芳「ドウも沒亭主、昨日參るべきは約束をして置きながら、畵き掛けの畵で何分手が引けないゆゑ、ツイ一日は違約をした、マア今日から當家へ泊ッ

て居て、芳山が一つ腕を揮って畫きませう」與「ぜ入來なさいまし」芳「ドウなすッたエ、大層元氣が無い、顏色も惡いが……」與「エー、お前さんが昨日來てお呉んなさりやア此樣なことは無いです」芳「ハア」與「ドウもトウトウ屏風に中りました」芳「お食んなすッたか」與「戯談言ッちやアいけませぬ、屏風を食ふ奴があるものですか」芳「ドウした？」與「ドウにも斯うにも話にやアなりませぬ、死んでまでも旅店なんてやつは實にするものぢやアございませぬナ」芳「ハア」與「昨日お前さん早く泊ッた乞食坊主があッた、此の寒氣に向ッて單衣一枚着やアがッて、頭などは栗の刺みたいな頭を仕やアがッてネ」芳「フヽム」與「茶代などを呉れて……」芳「ハア上等だネ」與「上等でも何でもない、デ彼の竹の間と云ふ一番座敷へ通しました、スルと上段の室を見て褒めて其處に在るのは何だと尋ねました、それから是れは

金屏風で、斯う云ふ譯だと云ふと、見たいものだと言ふから見せると大層褒めました、此の屏風は無地で畫くかとヤしますからさうぢやアございませぬ芳山さんと云ふ方に頼んで畫いて貰ひます、さうか其の男に畫かせるより己に畫かして呉れと云ふから、私もビックリして其樣なことは出來ない、芳山先生に頼みましたからドウしても出來ないとヤしたらさう云ふ田舍廻りの坊さんなどとは譯が違ふ」芳「酷いことを言ふナ」與「それからそれはドウでも宜い、私に何でも畫かせろと言ふので私が謝絶ッた、其樣なに畫きたけりやア盞所の澁團扇を畫きなさいと言ッて居る、其のうちに客樣が大勢入らしッたので、土藏へ納ッて置くと宜かッたですが、それに氣が附かないで出して置くと、夜半に畫いて逃げました」芳「其の金屏風へ？」與「エヽム チャクチャのものを畫いて實に嫌きました」芳「そりやア無法

な奴があるものだ併し畫工は」　與「畫工だか何工だか知りませぬ、先生マア二十五両三分二朱と二百六十八文打遣って仕舞ひました、それに屏風ばかりぢやアありませぬ、壁でも建具でも、壁だらけ」　芳「マア拝見しませう」　與「エー此方へ入らッしやい」と芳山を連れ、弟子も供をして上段の室へ來て見ると例の屏風が立って居た　與「先生は驚なさい、此樣な物を畫きやアがッて」　芳「フヽーム」と迂鳴ッた

第十二回

與「驚きましたらう」　芳「是れは驚いた」　與「さうでげせう」お前さんさへ驚くもの、二十五両三分と二百六十八文損になつた者はドノくらゐ驚くか知れませぬ」　芳「フヽーム、是れは驚いた」　與「大層また念を入れて驚きますナ」　芳「是れは驚いた」　與「私より

お前さんの方が驚きますナ、先生何で其樣なに驚きます」　芳「失禮だが淨亭主あなたの驚き樣と私の驚き樣とは違ふ」　與「へヽー驚き樣が違ひますか、ドウ云ふものでせう」　芳「お前さんは唯二十五両なにがしを失ッた、一概に斯う云ふ下らぬ物を畫いて往かれたと思ふ驚きだらうがさうでをざいませう」　與「さうです〳〵」　芳「私のは同じ畫工として筆を持ッて世渡りをしながら、ドウして斯う云ふ雜勢が出るか、ドウして斯う云ふ墨色が出るかと思ッて實に餘まり善く出來て居るので驚いた」　與「さうさ、人に力を附けやうと思ッて、褒めることに事を換へて此樣な物で先生が驚くはどのことはありますまい、供でも連れて立派な裝で」　芳「淨主人、妙なことを仰ッしやる、裸躰で來ても名人は名人、供を連れて來やうと下ンな裝をして來やうと技倆は違はないもの、さうでせう」　與「左樣でー」　芳「賴むお前さんが是れはム

チャクチャでさいませう、斯うしませう、お前さんの氣の濟むやうにします」　與「へゝエー」、芳「是れは幾ら掛りました？」　與「二十五兩三分二朱と二百六十八文」　芳「二十五兩三分二朱と二百六十八文か、ぢやア半端を取って是れを三十兩で私に讓って下さい、幸ひ金が此に有る、現金に之れを三十兩で私が買ひませう、それで此の通りの屏風が出來ますからは沒拭へなさい、今度出來上ッたのは私が及ばずながら山水あら山水を拔倆一ぱい書いて潤筆料は要ませぬ、禮として差上げます、其の代り此の屏風を讓ッて下さい、酬分此の屏風は私が家へ置いて書工の參考品になる、宜しけりやア三十兩の金を渡しませう」　與「ア、チョッと待ッて下さい、さうなるとまた少し見直します」　芳「見直す？」　與「待ちあさいヨ、慾張ッて居る、お前さんは」　芳「何だい、慾張ッて居るとは」　與「三十兩現金で買はうと言ふところを見

ると少し是は出來が善いか知ら」　芳「詰らぬことを言ッちやアいけない、沒亭主お前さんは怒ッて居るナ、さう腹を立ッて居るものぢやで見る所が屆かない、能く斯う氣を鎭めて沒覽あさい」　與「フゝム」　芳「チョイと二筆に書いてある、が、右の山と左の山では其の塲合五里と八里と隔ッて居るやうな塩梅で、自然と斯う浮いてる樣でせう」　與「左樣でげすナ、さう〳〵、山が斯う動く」　芳「動くと見ゐる、是れがその本當の筆だ」　與「へー」　芳「殊に此所は刷毛で書いたか、此は筆で書いたかと云ふことは、分らぬやうな芳山ではないが此の見越しの山は筆でなし、刷毛でなし、何で書きなすッたか是れは分らぬ」分らない譯だ單物の袖で書いたのだから

第十三回

與「フヽム、是れはドウも恐入ッた」　芳「三十両で宜うございます か」　與「ドウして、マア〳〵待ッて下さい、三十両ぢやア賣れませぬ、さうなると」　芳「賣れない？　慾張ッちやアいけない」　與「慾張る譯ぢやアない、成るほど是れは恐入ッたナ」　芳「旦那様、チヨイ〳〵畫いてあるやうだが瀧なぞは宛然水が落る様に見えませう」　與「左様、瀧の落るやうな音がする」　芳「音はしやアしない」　與「エー、是れは何しませう、マア賣るのは廢めませう」　芳「フム、旦沙汰止か」　與「ハ沙汰止かッて、田舍畫工の芳山の畫とは譯が違ふ」　芳「酷いことを言ふ」　與「エヽ、その両掛を擔がせたり、着物はベラ〳〵するのを着て居ても下手な奴は下手で」　芳「是れは驚いた面と對ッて」　與「縱令乞食坊主みたいな裝でも名人は名人」　芳「それは私が今言ッたことだ」　與「マア何です、私が驚いた態をしたんで、實は是れくらゐの畫工は日本に少うございます」　芳「

ソンなら旦那主、何も色を變へるには及ばぬが」　與「エ、色を變へはしませぬ、お前さんのやうな田舍廻りの畫工ゴマカシ畫工とは」　芳「亂暴だ、ハテナ」　與「先生、また何か見直しましたか」　芳「ハテナ、是れはどの物を畫くのに畫名が無い」　與「へー、ぐわめいと」　芳「畫名と云ふのは私が畫けば芳山だから芳山として、それに印が一つも無い、畫印が」　與「エ、印形ですか、印形は向ふで捺すと言ひましたが懇意だから別に印形には及ばぬ……」　芳「幾ら懇意だッて何と云ふ人が畫いたか……」　與「是れは私の先の女房の兄貴の嫁の弟の從兄弟の其の親父が」　芳「何だいそりやア」　與「エ、八五郎と言ふです」　芳「其様な名があるものか」　與「田舍廻りの畫工は賊にいかぬ、此の屏風を三十両に買ふなんて、お前さんは畫工ではない盜賊だ」　芳「亂暴なことを言ふ」と芳山は怒いて歸ッて仕舞ッた。サテ是れが一の評判に相成りました、大津の

驛の旅籠屋大津屋與左衛門の所には眞の山水見越しの山の屏風がある、彼の見越しの山は何で畫いたか知れないと云ふ評判になりまして下り上りの多い東海道大津のことでございますから京都より致して公卿堂上方が折に觸れて此の屏風を見に出でなさる、其の度見料と言ッて某かになり、サア今では此の屏風の稼ぎと云ふものは宏大もない、來る人毎に之れを褒めて居ります

第十四回

浮話岐れて守信先生は京都へ參り、思ひ掛けなく京都に暫らく滯在して遂に禁裏の御書所を預るやうになりました、さうなッて見ると擅私に筆を執ることは出來ませぬ、其のうちに大津の宿の旅店與左衛門の家に山水の屏風と云ふ評判が大層高くなりました、守信は、アヽ、悪戯をして來たのだがドウか自分の畫いたものだが眞に往ッて見たいと思ッて居る、けれども何分にも參ることが出來ませぬ。然るところ此の度両親の墓參を致すと云ふ願と、隅田川の櫻を寫して畫くと云ふことで、日數百日の間京都を立出ることを許されました、守信大きに喜んで供を連れ、かたゝしして親宿でございますから大津へ參ッたのがまだ四つ前、京都から三里でございますから、其のくらゐの時分には參りませう、本陣へ着いたし、こゝで小休を致して早速大津屋へ沙汰いたすには「山水の屏風を」と云ふことになる、モウ此の頃は大津屋の亭主は屏風が稼いで呉れるから、大きに喜び直ぐ羽織袴を着けて參る、一双の屏風は屏風長持へ入れて持ッて來まして、是れを本陣の廣間の正面の所へ立ッて與左衛門は其處に手を突いて見て居る。此方は昔の姿は無い、モウ探幽齋で立派な扮裝

でございまして、先づ其の屏風の樣子を見ると「少壯時分と云ふものは實にその威勢が違ふ、今此の通り畫けと言はれても迚も畫けない、自分ながらもアヽ面白い雄勢であッたと思ひながら、片脇を見ると頭は大層白髮になッて與左衛門が手を突き控へて居ります樣子」探「亭主や」與「ハヽー」探「是れがその貴公の家で自慢の屏風か」與「左樣でございます、是れが私共で自慢の眞の山水、見越しの山の屏風とヤすので、是れを畫いたのは何で畫いたか知れないとドノ畫工が參ッて見ても實に感心します、ヘーモウ寶物でございます」探「ハア、何と云ふ仁が畫いた」與「ヘー、それは手前の家内の兄貴の弟、の從兄弟の」探「大層ムヅカシイナ」與「久五郎と言ふんです」探「久五郎？」與「ヘーその久五郎が手前共へ參ッて、ドウも暴な野郎ですが畫は巧く畫きますから、そこで頼みました」探「その久五郎と云ふはドウし

た」與「モウ亡くなりました」探「死んだ、ア、氣の毒なことをした」與「エヽ此樣なに評判が畫ければモウチッと畫かして置くんでしたが、今更ら氣が附いてもモウ野郎が死んだから仕方がありませぬ」探「フム、大層亭主年を取ッたナ」與「ヘエー」探「チョッと足掛け十年だナ」與「何が十年です」探「忘れたか」與「ヘエー？」探「秋の末であッたが單衣一枚で破ない裝の乞食坊主が貴樣の所へ泊ッたら」與「ヘヘヽ」探「ソレ茶代を少々遣はして上段の室にあッた屏風を見せて貰ッて」言はれたときに與左衛門顏を少し上げて探幽先生の面を見て居たが與「オヤ！」探「大きにドウも其の時は失禮、今日は謝罪を致しに參ッた、私は久五郎とはヤさぬぞ」與「エヽそれはドウも恐入ッました、何から淨禮をヤして宜しうございませうか、彼の時の旦那樣で、賊にそれは申譯もございませぬ恐入りました、ドウか一つは勘

辨を」 與「イヤ謝るのは拙者の方で謝る、貴様が大金を掛けて拵へた屏風を無斷で斯様な惡戯をした、何程でも貴様の望み次第金子を遣はす、ドウぞ此の屏風は拙者に讓って呉れ」 與「ドウぞこれだけは勘辨を願ひます、十年以來此の屏風の稼ぎはナカ〳〵の大金手前共では是れが一番の稼ぎ人で」 探「稼ぎ人はをかしい」 與「をかしくても何でも稼ぎますから、ドウか一つ是れは此の儘手前共に下し置かれまするやう願ひたう存じます」 探「さう云ふて呉れるなら私が落款をしませう」 與「へー、落款とやしますと」 探「十年前に書いて云々と云ふ銘を入れて是れへ印を捺しませう」 與「旦那様は全體何とやします」 探「私は守信だ、京都へ參って傍書所となり止め筆となって探幽齋とやす」 與「へー、さうでございますか、難有う存じます、ドウか一つ左様なら是れへ落款を願ひたう存じます」

探幽は喜んで是れへその十年以前泊った其のときに書いたと云ふことを書き名前を入れまして、それへ落款をする間に與左衛門は其の場を退散して其の時分二百疋ばかりの菓子折を調へまして、他に唐紙だの或は絖、絹、扇子の百本も持って來て 與「旦那様ドウも色々難有う存じます」 探「落款をした」 與「エー、是れなら結構、是れは誠に詰らぬ物でございますが、ドウぞ傍道中ご忽籠の内で召食って下さいますやう」 探「イヤ、さう云ふことをして呉れては困る」 與「是れはホンの私の心ばかりでございます、ドウぞ召食って下さいますやう、就きましては誠に恐入りますがドウぞ願ひがございます、扇子が百本、絖、絹殘らず此の所へマアその持參を致しました、へーマアドウぞ今晩中に傍書

きなすッて」探「それはいかぬ、モウその涉止め筆になッて見ると擅私に筆を執る譯にはいかぬ」與「其樣なふとを仰つしやらないで手前どもでも是れを幾ら、にか……」探「狡猾な、怪しからぬ」與「ドウか」探「何と言ッても筆は執らぬ、一應伺はなければならぬから」與「ぢやアマア折角ですからドウぞ絹だけ」探「絹もいかぬ」與「貴方ドウも困ります、涉惡意を致しました廉を以て、それぢやア扇子をせめて十本ば書きなすッて」探「筆を執るふとが出來るなら絹でも紈でも又は扇子に染めやうと同じふと、それが出來ぬから謝絶ると言ふ」與「是れだけ願ひますものですから、ドウかせめてそれでは一本涉書なすッて」探「一本もいかぬ」亭主はアベコベを喰ッた、デ探幽先生は金子を取出し是れを亭主に遣はして筆を執るふとは强ッて辭退いたしました、小休をしたのだけれども、餘り亭主の話が面白いのでトウ〳〵其

の晩は大津の宿へ泊り翌日出立を致しました。後に至りまして此の守信と云ふ人は元々江戸の生れの人でございましたゆゑ、江戸が懐かしくて京都へは自分に代るだけの人を出すと云ふふとにして暫らく江戸へ止まッて、京橋の八官町に居りました、其の後日本橋呉服町に住ねを致したと云ふことでございます。ろふで此の屏風の方は其の後大津屋與左衛門が秘藏に致して居りました、とふろが與左衛門の悴の代になりましてから火災に遇ひ、漸々のふとで屏風だけ持出したが全燒になッて仕舞ひまして普請をすることが出來ない、とふろで丁度細川越中守樣が大津へ泊りに相成ッて、其の評判の屏風をば覽になり、是非之れを所望すると云ふことで、其の時分の金子五百兩で細川越中守樣が求めに相成りました、左れば探幽の書いた眞の山水見越しの山の屏風と云ふのは細川家に留ッて居ります、大津屋に於

きましては其の屏風を賣りましたので漸々普請を致し、現今は大津の宿に大津屋宇兵衛と申して其の家が殘り居ります。是れが探幽の金屏風の傳話でございます。

探幽の屏風 終

附錄

三井の大黒

（左甚五郎名作）

お好に依まして甚五郎利勝のお話しを申し上ます甚五郎といふ人は生は飛彈の山裾でございます百姓甚左衛門と言ふ人の息子で飛彈の匠の弟子に成りまして名前を飛彈の甚五郎といひ大左腕利であつた故左甚五郎といふ者もあります

俗師匠も段々丹精を致しまして甚五郎がモウ一人前に成りました所で鑿を二挺革の嚢へ入れ　師「さて甚五郎や俺も長い間丹精をしてやつたが貴樣の器用なのには俺も恐れた此先天狗に成つては不可ンが併し此な所に引込で居た日には迚も充分に本當の仕事は出來ん夫故に國々を廻り一ト修業して歸るが宜必ず立派に成り親父にも安心させるであらふ夫に就ては京大坂へ

江戸と此三都で一ト修業苦しんで歸つて來い是は少し許だが路用だといつて十兩金をやりました甚五郎は左のみ悦びも致しませんで　甚「誠に有難ふ存じます一ト修業して參ります間親父の所は何分お頼み申しますといつて飛彈の山猿を出ましたデ京都へ乘込んで參りましたが師匠から手紙を貰つた先があるに依て暫く伏見に足を止て居たデ仕事もしないで毎日酒ばかり呑んブラ〳〵して居りましたが何しろ仏からの手紙を貰つて來た者故粗略の扱ひはいたしません、デ成日のこと其家の弟子が　弟「エー先生〳〵　甚「アイ　弟「お前さんに用のある といふ人が來ましたよ　甚「何所から來た　弟「江戸から來たといことで　甚「ハー江戸からハテナ俺は未だ江戸へ行たことはないが何しろ上て見てくれ　弟「へエ此方へれ上んなされまし　男「貝平御免下さいと這入つて來た人物を見ますると年は四十

一二の商人風の男　男「エー手前は江戸表駿河町三井八郎右衛門の手代久兵衛と申ますが貴君樣が甚五郎先生で　甚「ハイ俺は甚五郎ですが何御用で　久「エ、早速申上ますが先生に彫刻を一ツ願ひたう存じまして主人からの申し付で出ましてございますが　甚「成程　久「此方樣に先生御逗留といふことを承たはりまして……　甚「無暗に彫刻物ッたつてわしに出來るものなら宜いがどんなものです　久「エ、手前共の出店がソノ阿波にございます　甚「ウム　久「其出店の方から蛭子を祀つて呉れまして　甚「ハア成程　久「大黒がございませんのでございますどうか大黒を彫て頂だきたう存じます　甚「ウム夫は蛭子大黒と揃つて居なくつちやアならないものだが片ッ方をなくして仕舞つたのかへ但しは燒きでもしたのかへ毀したのかエ　久「イエ然うゆふ譯ではありません素より出店から祝つて寄越

しましたのが蛭子ばかりなので　甚「フム夫は不思議だ　久「最ともうれに短冊が附いて居ります

商賣は濡手であはの掴取り

と斯うでございます　甚「ハ、ハー成程うれから　久「ヘエ主人は何卒一對にいたしたいと箇樣に申されましたから先生の御高名を承知して出ましてございます　甚「大黒なら六ヶ敷いことも なからう彫りませうが全体其蛭子は誰が彫たんだイ　久「エヽ雲慶の作でございます　甚「ハア成程相手は雲慶と餘り粗末の仕事も出來ないナ木は何だ　久「檜で　甚「大きさは何の位ゐ　久「五寸　甚「拵らへませう　久「何卒願ひ度存じます就きましては先生何程でございませう　甚「お前も能々江戸から頼れて來て呉ンなすつたものだ餘り高いこともいへまい安くして彫つてやらう　久「ヘエ有難う存じます　甚「百兩で宜い　久「ヘエ

甚「百兩で宜い　久「先生大黒ばかりで　甚「大黒計りサ　久「大きさは五寸で　甚「五寸は知つてるよ　久「百兩でげすか　甚「何もうんなに妙な顔をするには及ばない無理に彫らうてへのではいお前の方から彫て呉ろと頼むから彫るんだ否なら止すが宜い　久「先生何もれ高いといふ次第でもございませんが如何でございませうかモウ少々お格好には　甚「相手が雲慶だからナウうれゆゑ俺の方で安くして百兩といふのだが粗末で宜ければナニそれは五十兩でも十五兩でも三兩でも二兩でも宜い又大きいのが宜いならば一尺二尺にしたッて大して値へ往つて違ひもねへものだ　久「イエ手前の方でも寶物にいたしますものでございますが餘り飛違ひましては　甚「うれだから俺の方で安くして百兩といふのだ　久「ヘエ宜しうございます何分一ツ願ひたう存じます　甚「アヽ諾々承知しましたダガヲ俺の方

も頻々和郎から頼まれて見ると材木を買はなければならんテ久「ヘエ　甚「ソコで半金置いてッて貰はなくッちやアならねへ久兵術も慾ろいた高が檜で五寸の大黒を彫て貰ふのに材木を買ふなんてへ大形なことはなからうと思ひましたが　久「ヘエ　甚「アヽ五十兩置いてッてれ呉れ、三井長こまりました五十金の手代も五十兩と聰いて只今此所に持て居ませんといふのも氣が利かず主人の耻辱にもならうと思ひましたから　久「宜しうございます」と五十兩差出まして　久「エヽ甚はだ恐れ入ます　甚「受取は要らない　久「へが御受取を一ッ願ひたう存じます　甚「受取は要らないよ直接に斯うやつて甚五郎が受取たンエ　甚「受取は要らないよ直接に斯うやつて甚五郎が受取たンだ大丈夫だ二重取をする氣遣ひはないよ　久「イエさういふ次第では有ませんが主人に箇様に先生へ御渡し申しましたといつて見せますンで　甚「それは唯甚五郎に渡して來たといつた

ら受取を見せんでも主人もグッグッいふ所ろはなからう斯うやつて使ひに寄越す位ねだから主人も疑ぐる處ろは有るまい百兩や五十兩のことでグッグッ受取なんテ面倒臭いことをいふならば持つて歸れ無理に彫らうといふのではない　久「エヽ宜しうございます　エー何時頃出來ませうか　甚「何時出來るか出來る處ろは分らない　久「ヘエー何時だか分まりせんか　甚「ウム、分らない　久「カツキリでございませんでも凡そ何時頃といふことは分りませう　甚「ドウモ分らないナ　久「先生がお彫りになるのでございませう　甚「吾儕が彫るのヨ　久「先生の御了簡で此位ねには出來るだらうといふことが　甚「吾儕の了簡ぢやア明日にも拵らへる積りだが彫り座くならねへでは彫らねへのだからナ　久「ヘイ　甚「明日にも大黒を彫ッて見樣かしらんてへ氣になるか三月經ッて彫らうといふ氣になるか其處

は判然分らねへ彫る氣になならなけりや分る譯には行かんから我身ながら何時だか分らねへ彫る氣に成るまで何時迄も打捨らかして置くのだから三年經ツか四年經つか分らねエ　久「ろれでも何時か一度は彫る氣になるでせうナ　甚「さうヨ容子に依ると一生彫る氣が出ねへかも知れねへ其時は香奠と思つて斷念らめろ　久「御冗談御仰つては不可ません　甚「ろんなことは嘘だが彫る氣になれば直ぐに拵らへるから　久「御當寄樣迄頂戴に出ましして宜しいのでございませうか　甚「吾儕のことだから何時迄爰に居るか何處に居るか其臨は分らねへ　久「れでは戴たきに出ますことが出來ませんが　甚「ちやア斯うしてやらう出來上ッた時は吾儕の方から手紙を出す何處其許に居るから取りにお出でなさいといふ手紙を出さう　久「何卒左樣頂ひます　甚「慥かに五十兩は預かつた　久「大きにれ喧ましう

ございました」久兵衛は表へ飛出したが……ハテナ大變なことをして仕舞つた主人の耻にもならうと思ひ我慢して金を渡したが何時出來るかしらん餘ンまり長くなると主人に小言をいはれるが心配をしながら歸りました偖甚五郎が受合つた一伍一什を伏見の棟梁も聞いて居りまして　棟「先生〳〵　甚「アヽ棟「れ前さんは大黒を受合つて早く彫つちまつたら宜からう　甚「何に半金取ッて有るから何時か一度は彫る　棟「スン〳〵彫つて又跡を引受けたら　甚「馬鹿をいふな氣のねへものを彫つたつて何んの役にも立ねへ何しろ酒肴を誂らへて呉れろ」と五十兩飛込んで來たのだから友達を呼で無闇に奢り散らしブラ遊んで居りました其中に甚五郎五十兩位ゐの金は忽ちなくなつて仕舞ひます樣な譯或る日甚五郎は湯から歸ッて來て　甚「棟梁今湯で一寸話しを聞いたがア江戸が大厨燒けたさ

うダ　棟「エヽさうですか　甚「ドーも大變忙がしいてへ話しを聞いたが吾輩は江戸は初めてだが何うか一ッさういふ忙がしい處ろへ往ッて見物を仕様と思ふから氣の毒だが今迄厄介になつて些とも仕事をしねへで出掛るが何れ又埋合せを仕様ヨ棟「宜しうございますとも飛彈の棟梁の處ろでは色々私くしも御厄介になりましたから決して御心配なく　甚明日立ッ積りだから友達衆に宜しく申して呉れ　棟「貴下路用を幾らか御持ちなさいませんでは差支へますせう　甚ナアニ心配は要らない金抔は直さに出來るからと甚五郎は僅か計りの金を持つて苦にもいたさず伏見を立まして段々東海道をやつてまゐり鳴海の手前まで來るとモー一文なし……ドウしたもんだらう錢がねへから同じ旅籠へ着いて食ひ倒すなら客な旅籠屋を食倒さないで少しは宿でも名高い少々位ね食倒されても無ろかない

といふ樣な家へ泊つてやらうと斯う心得てスタスタやつて來ると宿引「へ、旦那樣お泊りでございませんか旦那樣お泊り遊ばしませ大松屋でございます佐兵衛方でございます　宿引女「旦那樣お泊り下さいまし鳴海宿の大松屋佐兵衛でございます旦那樣お泊り下さいまし　甚何に泊つて呉れ　女「ハイ鳴海宿の大松屋佐兵衛でございます　甚「ハア泊つて呉れろと頼むんだね女「左樣でございます　甚「頼まなけりア泊られねへ積りだが頼むんだから泊つて遣る　女「有難うございます此方へ入らつしやいまし旦那樣御客樣が入らつしやいました　主人「毎度ドーも有難うございます何卒れ通り下さいへと只今御荷物は持たして差上げます　甚「今夜は亭主厄介になります　主人「ハイ有難う存じますアノ三番へ御案内しな旦那樣直ぐに御風呂が宜しうございます　甚「ウム亭主氣の毒だが大分疲れて居るから出入り

の按摩が有るだらう湯に這入って一杯やつて仕舞ふと療治を為せるから按摩を頼むヨ　主人「ヘイ畏こまりました　女「何卒此方へ願ひます旦那様毎度有難うございます　甚「今アノ帳場に居たのは亭主だらう　女「ハイ左様でございます　甚「御亭主に然ふいつて呉れ生憎今細かいのが出してないから一寸細かいのを一両貸して呉れる様に　女「ハイ畏こまりました……御待遠様〳〵　甚「ア、宜々之を少し計りだがッて亭主に茶代を一分やて呉れ　女「有難う存じます　甚「貴様是で莫でも買ふが宜い　女「これは有難う」一分二朱やつて跡の残り二分二朱は已れの懐中へ投り込んで仕舞ひ湯から上ッて一杯やらかして居ります處へ亭主が袴を穿き一分呉た客人だからお茶も吟味をして呉れ菓子も上等なのを持出し慇懃にうれへ爾手を支へまして亭「入らッしやいまし毎度御贔負有難う存じます只今は又女房

迄まで御心配下さり御茶代も充分に　甚「イヤ〳〵さう丁寧に禮をいふナ貴様の物で禮をいふ様なものだから　亭「ヘイ　甚何に亭主貴様は酒をやるか　亭「有難う存じますヘイ戴きます　甚「ア、宜々大変な横柄な客人だと思ひなれ入ります是は有難う存じます」　亭「只今按摩を」といつから亭主も二三杯相手をいたしまして　〳〵眠つて仕舞ひました翌日立つかと思ふと立たないで朝から早々引取る引連へて按摩が参る療治をさせて甚五郎はグウ〳〵酒を始め爰に暫らく足を駐めて居りましたが家内といふものは細かい處ろに氣の付くもので佐兵衛に向ひ　女房「チ貴下　佐「何ダ　女「三番のれ客様すアレを戴いたら宜うございませう　佐「マア宜いやナ　女「宜いたッて三日が御定法です三日經ッたら戴いたいても宜いぢやアありませんか　佐「馬鹿をいふな一人で突然ズバリと一分のれ茶代を下さるお客様だろれに此宿